

The region agriculture leader of Wakayama Prefecture

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

和歌山の 農業士

2021
11
November

地域農業をリードする熱き農業者達

第17号



はじめに

本誌『和歌山の農業士』は、和歌山県の地域農業を牽引するリーダーとして知事に認定された『農業士』が、互いの活動を共有するとともに、関係者の皆様や一般の方々へも、広く積極的に情報発信していくため作成しています。

農業士が長年の農業経験で培った経営観や、これからの農業にかける熱い想いを紹介する内容に加え、各地域で展開される農業改良普及活動や、農業士会としての取り組みなどを内容に盛り込んでいます。

農業に関係する皆様方には、是非、ご一読頂き、地域農業の実情や農業経営の現状等について、ご理解を深めて頂ければ幸いです。

C【目次】 CONTENTS

<巻頭言>

- コロナに負けずに！！ (有田地方農業士協議会 会長 森田 耕司) 1
農業をさらに魅力ある産業に (和歌山県農林水産部 農業生産局 局長 西森 裕夫) 2

<私の農業>

農業士達がこれまで培った自身の経営や活動を紹介

- 地元の農業を守りたい ～変化する気候に対応して農業に取り組む～
(和歌山市 指導農業士 竹田 和正) 3
いままでの10年とこれからの10年
(紀の川市 青年農業士 長谷川 博) 5
果樹の複合経営から柿中心の経営へ ～ブランド産地の継承！柿栽培への取り組み～
(九度山町 地域農業士 井上 靖雄) 7
省力化を進め、効率的で持続的なみかん経営を目指す
(有田川町 地域農業士 池下 康実) 9
人生の道、「農道」を進む (印南町 地域農業士 山下 勝也) 11
今後も楽しく農業をしていきたい！
(田辺市 指導農業士 橋坂 佐都美) 13

<農業に懸ける想い>

農業への熱い思いや取り組みを紹介

- 挑戦心をいつまでも ～より良い品質に向けて～
(和歌山市 青年農業士 辻本 晃啓) 15
管理会計で確かな判断を (岩出市 地域農業士 勢田 幸治) 16
なんでも楽しいほうがいい (橋本市 青年農業士 尾崎 正和) 17
みかんとイチゴの複合栽培 (広川町 青年農業士 浦 将也) 18
すべてが加速していく世の中で (御坊市 青年農業士 黒田 誠司) 19
自分の農業について (田辺市 青年農業士 中山 雄史) 20
地域農業を守りたい (新宮市 東牟婁農業青少年クラブ 瀧谷 弦) 21

<県農林大学校学生です。>

- 農学部1年生の自己紹介&近況報告(第1回) 22

園芸学科

- 有田 大記 有本 那智 植田 康太 奥山 智成
下村 梨乃 鈴木 瑞穂 鈴木 幸羽 田中 壮真
谷脇 悠真

巻頭言

コロナに負けずに!!

有田地方農業士協議会

会長 森田 耕司



令和2年始めより世界中で新型コロナウイルス感染症がまん延しはじめ、生活が一変してしまいました。農業士会活動も思うようにできず、残念な日々が続いています。県役員とともに有田地方農業士会役員もまだまだ役責を果たせていないとの思いから留任することといたしました。農業士会としては、せめて会員をはじめ農家の皆さんに情報だけでもとの思いから、事務局からいろんな補助事業や新しい施策等の情報を郵送させていただいております。少しでも農業経営に役立てばと願っております。

さて、当有田地域はみかんを中心とした柑橘栽培が盛んな地域です。令和3年2月には有田4市町を含む地域が「みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム」として日本農業遺産として認定されました。当地方では400年以上にわたりみかん栽培が継承されており、栽培している中で数多くの優良品種を発見し、地元で2年生土付き苗木を生産、そして地勢、地質の組み合わせに応じた品種を栽培し、全国へ出荷して産地を形成してきました。現在、多くのみかん産地が栽培面積を減少させる中、栽培面積を維持しております。農業士会としても情報交換をより密にし、耕作放棄地が少しでも出ないように農地を守っていきたくと考えております。

たとえ農家に後継者がいなくても、優良品種への改植等を進め、収益性の良い農地（お金のあがる畑）にしておくことで誰かが栽培してくれます。その誰

かが農地の後継者になってくれるのです。地域が農地を守り、産地を維持していかねばと考えています。令和3年6月より、私はありだ農業協同組合の組合長に就任し、いかに産地を守り、持続発展させていくかということに日々奮闘しております。

コロナ禍においても柑橘類は巣ごもり需要のおかげで前年以上の販売高を確保できましたが、これほどコロナ感染症の流行が続くと経済の先行きが見通せず、昨年同様に販売ができるであろうと楽観はしておれません。関係各位と連携しながら市場でのシェア拡大をはかり、少しでも有利販売できる方策を考えねばなりません。

一日も早くコロナ感染症が終息し、マスクをしなくても良い普通の生活ができる日が来ることを願うばかりです。そして今までのように会員相互の交流ができ、お酒を飲みながら和歌山の農業の将来を語り合いたいものです。長年にわたる農業士会活動で有田地方はもとより和歌山県内の農業士さんや県関係者の方々と知り合いになれたことは私のにとってはかけがえのない財産です。人とのネットワークを活かしながら有田農業、和歌山農業の発展に少しでも寄与できれば幸いです。今後も御指導、御鞭撻の程よろしく願いいたします。

最後に会員皆様の御健勝と和歌山県農業の益々の発展をお祈り申し上げます。

巻頭言

農業をさらに魅力ある産業に

和歌山県農林水産部農業生産局

局長 西 森 裕 夫



最新の統計によると、和歌山県の令和元年の農業産出額は1,109億円で、5年前の平成26年に比べ16%増加しています。主な要因は、本県の2大農産物であるみかんとうめの価格が上昇したことで、野菜ではしょうがやいちごが産出額を伸ばしました。しかし、平成30年以後はみかんの価格の伸び悩みなどにより産出額は微減しており、今後も高品質な農産物の安定出荷に向けさらに努力が必要です。

一方、生産現場では農家の高齢化に伴い担い手が減少するとともに、遊休農地も増加しており、生産力は低下してきています。今後の農業の維持・発展にはこうした地域の生産力の強化は不可欠です。

【生産性を向上させよう】 限られた労働力に頼る現在では、生産性が重要です。生産性は、生産量（売上）を上げることと同時に、できるだけ手間や経費を省くことで向上します。例えば、果樹園では樹形を工夫したり生産性の低い樹の改植など、調整作業等も工程を少し「カイゼン」するだけで時間短縮が可能かもしれません。効率を高めるため農地の集積や改良も必要です。また、スマート農業や新技術等も効果とコストを勘案して上手に導入したいものです。生産性が向上すれば、利益率も高まり新たな投資や雇用、規模拡大も容易になってきます。

【地域で担い手を育成しよう】 令和2年度の本県の新規就農者は160人ですが、このうち、異業種

からの参入は49人、農業法人への雇用就農は48人で、近年、農業外から参入が増えています。農家の後継者が減少する中、地域農業を維持するためにこうした新規参入者は重要です。しかし、新規参入には農地の確保や技術の習得、販路の確保、さらには機械や倉庫、住宅の確保など様々な課題があり、これらの解決には行政等の支援に加えて、農業者をはじめとする地域の協力が欠かせないのです。

【新3K農業へ】 かつて農業は3K（きつい、汚い、危険）と言われ、農産物の価格低迷も加わって、農家子弟が農業から離れていきました。しかし、近年は新3K（感動、カッコいい、稼げる）とも言われるように、農業に魅力を感じ取り組もうとする人が増えてきています。そこには、作物を生産し商品として提供することへの「やりがい」と、時間や経済的な「ゆとり」、そして何より経営として「儲かる・成長する」ことが重要で、現在の農業者がそれを実現して発信していくことが必要だと思います。

農業士の皆様には、これまでも地域農業のリーダーとしてご活躍されていることに改めて敬意と感謝を表します。上記のことなどはすでに実践され、釈迦に説法だとは思いますが、「農業をさらに魅力ある産業に」できるよう、県行政も様々な支援策により皆様とともにがんばりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

私の農業

地元の農業を守りたい ～変化する気候に対応して農業に取り組む～

和歌山市 指導農業士

竹田 和正



1. はじめに

私は就農前、和歌山北農業協同組合（現：わかやま農業協同組合）に13年間勤めていました。それまでも実家の農業の手伝いはしていましたが、主で農業をしていた母が体調を壊したのをきっかけに30歳で就農しました。就農時の栽培面積は、所有の水田90aと畑地20aでしたが、その後農地を借り受けて経営規模を拡大してきました。妻と2人で水稲と裏作野菜を栽培しています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
水稲	270a
裏作野菜	190a
ハクサイ	90a
キャベツ	70a
ブロッコリー	20a
ロメインレタス	10a
○労働力	
家族	2人

2. 農業経営の特徴

水稲と裏作野菜として、ハクサイ、キャベツ、ブロッコリー、約5年前からロメインレタスも栽培しています。

10年ほど前から温暖化などにより気候が変化し

ており、今までと同じ栽培方法では良い品質のものを作れなくなっていると感じています。例えば、昔はかん水をしなくても栽培できていたものがそうでなくなったり、年々アブラナ科作物の根こぶ病が多発するようになったりしています。そこで、多少の気象変化ならば栽培可能な品目の面積を増やし、JAわかやまで契約栽培できるキク科のロメインレタスといった新しい品目を導入してリスク回避と経営の安定化を目指し、気候の変化に対応した農業経営を行っています。

時期によっては裏作野菜の育苗も難しくなってきたところ、2012年にJAわかやまのグリーンステーションができたのをきっかけに、苗を適宜購入することで省力化を図っています。機械導入も行っており、水稲で使う機械（トラクター、コンバイン、乾燥機など）はもちろんあります。裏作野菜



移植機での裏作野菜定植の様子

のための移植機も就農 10 年後には導入し、規模拡大が図れました。



トラクターでの耕耘の様子

また、就農時から JA わかやまの青壮年部の北支部長や JA わかやま軟弱野菜部会の北ブロック班長、JA わかやまロメインレタス部会の部会長などに就かせていただき、この 6 月からは JA わかやまの理事にも就任しました。部会などに積極的に参加することで他の農家と情報共有し、地域農業を盛り立てていけたらと思っています。また、海草振興局とのお付き合いも長く、和歌山県農業士会の役員もさせていただきまし、普及指導協力員も長年させていただいています。県職員の方とお付き合いさせていただくことで、いろいろな情報を入手でき、困った時に相談などもさせてもらえるので心強いです。

3. 今後の経営方針

全国的にそうですが、私の地域にも後継者が少ないのが現状です。地域の農業を守るため、最高で 450a の田を借り受けて作っていたこともありますが、私がいつまでも作れる訳ではなく、体力の衰えも日々感じてきています。これから新しく農業を始める方を増やしたいと、これまで和歌山県農林大学の学生さんなどの研修を受け入れてきました。

また、今後は農地の規模拡大は難しいので、重量野菜以外の品目の選定やさらなる省力化を図り、後継者にバトンタッチできるまで頑張りたいと思っています。

4. おわりに

これからさらなる気象変化によって農業がどんどんやりにくくなっていくと考えられます。また、自分自身の体力とも戦っていかねばなりません。そのような中で地元の農業をいかに守っていけるか、農業をどれだけ続けていけるか、どうすれば後継者を育てていけるか、日々模索しながら農業に取り組んでいきたいと思っています。



コンバインでの稲刈りの様子

私の農業

いままでの10年とこれからの10年

紀の川市 青年農業士
長谷川 博



1. はじめに

私は2011年4月東日本大震災とほぼ同時期に農業をはじめました。今で農業を始めて10年ほどたちます。

最初はJAの指導員や先輩農家と相談し露地水ナスとズッキーニからスタートしました。

就農して半年たったころ青年就農給付金の制度がスタートしたと思います。施設や機械、資金がない中での給付金制度はとてありがたかったと記憶しています。

この資金のおかげもあり10aのハウスを建て、就農4年目にハウスでの水ナスの栽培をスタート。このあたりで少し経営が安定したように記憶しています。

7年目ぐらいにハウスをもう10aほど増やし、近年の気候条件なども踏まえ栽培品目を水ナスから千両ナスへ変更しました。現在は茄子20a、胡瓜3aを中心とした経営状態です。

2. 農業経営の特徴

基本的に一人での営農なので4年前ぐらいまでは自分の労働時間を増やすことで収益を地道に増やしていきました。しかし①収入が頭打ちになったこと②新技術や実験が好きなこと③結婚し子供ができたため家族の時間を増やしたい。以上3点の理由でハウス内の統合環境制御をスタート。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
茄子	20a
胡瓜	3a
八朔（早生含む）	10a
露地野菜	10a
○労働力	
家族	1人
常時雇用（アルバイト）	2人

まず4年前からハウス内環境をモニタリングして自分の勤での制御がいかにおかしなことをしているかが見えてきました。そして昨年より制御をスタート。昨年は換気、カーテン、暖房、CO₂の4点の制御でした。



ハウス内環境の制御盤

昨年より雇用も始めたため圧倒的に労働時間が減り家族の時間などほかのことに時間が使えるように

なりました。そして、そのおかげで夏に2、3週間程度の夏休み期間を設けることができました。

3. 今後の経営方針

今年より追加制御で日射比例灌水と株元加温などをスタートし、収量と秀品率の向上に努めたいと思います。

あと2年で40歳になるのと昨年痛風が発症したとき作業ができなかった経験から病気や怪我、販促など自分がいない状態だろうが少しずつでも畑が回っていくようにしたいと思っています。



ナスの定植作業

また、妻の実家が果樹農家で2haほどあるのでそちらも引き継いでいくためにはやはり自分の体をいかに空けるかと機械化及び機械化するための栽植密度などが重要と思っています。

また、減農薬や有機栽培にも少しずつ取り組んではいますが、知識、経験、技術不足のためしっかりとやりきれていないのが現状です。

上記のことを5年以内に進めていきたいと思っています。

4. おわりに

まだまだやりたいことは山のようにあります。

やりたい品目、やりたい栽培方法、極めたい環境制御。自分の経営だけでも書ききれません。

そのうえで私が農業をしている地域は専門農家が

とても少なく10年たったら共同作業での溝掃除の人員がいるのかな？ととても不安になったりします。

これらのことは問題が表面化する前から手を打つ必要があると思っていますので、今後10年で水路や畑への道など農業インフラをきちんと残しておいたりする取り組みも怠らないようにしたいです。

ただ、こうしたことは1人では難しいので公的機関、JA、青年農業士同士のつながりも大切にしていきたいです。



定植作業を終えて



温度、湿度、CO₂濃度を測定する環境制御計測機器



ハウス外観

果樹の複合経営から柿中心の経営へ ～ブランド産地の継承！柿栽培への取り組み～

九度山町 地域農業士

井上 靖雄



1. はじめに

私は、今から約40年前に県農業大学校（現 農林大学校）において果樹の栽培技術を学び、昭和58年に卒業しました。

その頃は、父母ともまだ若かったので、一旦は就職を選択し、約13年間桃山町の造園業者に勤めました。

その後、我が家の農業経営の状況と両親の高齢化等を考え、34歳頃から本格的に就農しました。

2. 農業経営の特徴

就農した当時は父母が営農の主体であり、柿と温州みかんを経営の中心として、桃、八朔を加えた果樹の複合経営に取り組んでいました。しかし、当時の温州みかんは生産過剰により価格が低迷し、経営状況が悪化していたことから、「刀根早生」の導入を試みました。私が就農した頃は、「刀根早生」はそれほど生産する人が多くなかったため、コンテナ1杯が1万円で取引されていました。

「刀根早生」の栽培に手ごたえを感じ、「温州みかん」と「桃」を「刀根早生」に転換するとともに、「富有」も栽培面積を20aから50aにするなど、柿の栽培面積を拡大して柿中心の経営に転換しました。

経営規模の拡大に伴い、農作業の効率化と軽労化、省力化等について考えました。造園業の経験を生かして園内道の整備や園地の造成等を行い、経営基盤の整備を進めました。45歳の頃にスピードスプレーヤーを導入し、現在は約60%の園内で防除に

農業経営の概況

○作付品目と面積	
柿	180 a
┌ 刀根早生	100 a
├ 平核無	30 a
└ 富有	50 a
八朔	20 a
○労働力	
家族労力	3人
雇用	2人

活用しています。

他に軽トラックを2台、クローラ運搬車、モノラック等を保有し、ガーデンと呼んでいるダンプ機能付きの三輪運搬車については、製造技術を持った業者が見られなくなったので、自分自身でメンテナンスをしながら大事に使用しています。

農作業は家族労力で実施していますが、柿の摘蕾や収穫時期は多忙になるため、臨時で2名の方に仕



柿の摘果作業

事をお願いしています。

整枝・剪定に関しては、農業大学校や造園業者時代と4Hクラブの仲間と学んだ知識や技術を活かし、柿の三品種「刀根早生」、「平核無」、「富有」および「八朔」ともに、個別の樹形や樹勢に合わせた管理を実施しています。

収穫物の出荷先は、全量をJA紀北かわかみに出荷しています。直売は、どうしても頼まれた時に少しでも協力したことがある程度です。

3. 今後の経営方針

柿中心の経営を行っている中、現在の品種構成では労力の分散が難しく、今後の自身の高齢化に伴い、労力の確保が経営上の課題になると考えています。現在、「刀根早生」の面積が最も大きいため、他品種への転換を進めて労力を分散し、経営の効率化を図ります。

一方、「富有」は九度山町のブランドであり、栽培にはこだわりがあります。また、祖父の代から栽培している我が家の伝統ある品種なので、「富有」は現状維持の方針です。

4. おわりに

私が就農を考えた当時は、九度山町に4Hクラブはありませんでした。そこで、造園業者に勤めながら仲間たちと4Hクラブを立ち上げました。就農後は15～20名のクラブ員とともに研修や視察等に取り組み、平成18年頃まで活動してきました。

私の果樹栽培は、造園業時代に培った経験と、4Hクラブの仲間との活動で得た知識や栽培技術が基礎となっています。この頃に磨いた健全な樹体管理技術が私のこだわりとなっており、これからも樹1本ずつの状態を把握しながら育てていきます。

また、我が家の「富有」は、約100年以上前に岐阜県から入って来た頃、祖父が導入しました。現在も樹齢100年以上の樹が残っています。祖父の残した歴史的価値のある「富有」の樹を、今後も大切に維持していきたいと考えています。



自身で整備した園内道



スピードスプレーヤ



三輪の運搬車



樹齢100年以上の「富有」

省力化を進め、効率的で持続的なみかん経営を目指す

有田川町 地域農業士

池下 康実



1. はじめに

私が就農したのは平成8年。大学の農学部を卒業後、両親が営んでいた農業を継いで就農しました。

我が家のみかん経営は父が20代の頃から始めたので、私は2代目です。

就農当時は耕作面積も少なく、これをカバーするためにハウスみかんを栽培するとともに、経営規模拡大に取り組んできました。

2. 農業経営の特徴

私が小学校2年生の頃、父が始めたハウスみかんが54aあり、就農後、24、5歳から露地とハウスみかんに取り組んできました。

父の代から規模拡大を進めてきたのですが、私もさらに規模拡大を進め、2haを超えてきたので、3年ほど前からハウスみかんを止めて全て露地にしました。

我が家の周辺の園地は元々水田で、平坦地が多く、女性の方でも働きやすく、人手が確保しやすいのが特徴です。

山畑も自動車が上まで入ることができて、作業性が良い園地になるよう、設計してきました。

写真は私が27歳の時に、父が開墾した園地をさらに拡大して開墾した園地です。

谷の中央に舗装路を通し、そこから左右の尾根側に向かって横に道をつけ、自動車が出入りできるよ

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	237a
極早生	112a
早生	114a
普通	11a
晩柑	9a
水稻	11a
○労働力	
家族	4人
雇用	6人

うになっています。スプリンクラーも設置し、平坦地に近い作業性を確保できるよう、工夫してきました。

尾根に向かう道路はまだ未舗装ですので、今後、コンクリートで舗装して車が通りやすく、雨で削られないように整備していく予定です。

品種構成では、極早生の割合が多く、普通温州とほぼ同じ面積となっています。

極早生は「上野早生」と「ゆら早生」です。

「ゆら早生」は乾燥に弱く、平坦地が多い我が家には適した品種です。

収量が安定しており、近年の多雨環境の中でも品質も安定しており、老木園から改植を進めてきました。山畑においても、「ゆら早生」へ改植していきたいと考えています。

早生も樹齢が古いので、更新を進めています。

園内道を設けた山畑



谷の中央に上まで舗装路を設置
(下から見上げた写真)



中央の道路から尾根に向かって
横に通る道路を設置
(上から見下ろした写真)



園地の上まで自動車が入る

3. 今後の経営方針

改植を進めるとともに、現在の7～8の取扱量で同じ売り上げが得られるように経営の効率化を進めていきたいと考えています。

早生は私よりも樹齢が上の老木も多く、極早生の品種更新とともに改植を進めていきます。

また、50歳に近づいてきたことから、今後の経営を考え、機械化、省力化を進めたいと考えています。

我が家はフォークリフトがなく、積み降ろしは電動ホイストで行っていましたが、今秋からはフォークリフトを併用します。

園地についても、モノラックの更新、スプリンクラーの増設、園内道の設置を進めていきます。

園内道は省力化を進める上で、重要と考えており、一輪車を使わないでも軽トラにコンテナを積める園地を増やしていきたいと思っています。

改植の際には園地を畝形状にし、マルチの敷設がしやすい園地に変えていきたいと考えています。

4. おわりに

後継者については未定ですが、未来の後継者に応えるためには、前述の機械化、省力化、経営の効率化が必須であると考えます。

その時「継ぐな」と言わなくてもいい経営者になりたいと思います。

「ゆら早生」について、近年の温暖化・高温多雨の気象条件に負けない『出るべきして出てくれた品種』ととらえ、「上野早生」からの更新を進めたいと思います。

人生の道、「農道」を進む

印南町 地域農業士

山下 勝也



1. はじめに

私は南部高校園芸科を卒業後すぐに就農しました。

両親が以前から露地小菊を栽培していましたが、当時はまだマイナーであった施設花き栽培に就農2年目より取り組み始めました。

当時はバブル期であったため切り花は高値で取り引きされ、御坊市名田地区では、翌年から爆発的に施設花き栽培が増え始めました。

1992年には、印南町主催による10日間のヨーロッパ研修に4Hクラブ員で参加しました。それがきっかけでヨーロッパが好きになり、その後、新婚旅行も含め4回訪れることとなります。

その研修において、オランダで国際園芸博覧会『フロリアード』を見たことが、私の花き栽培に対する気持ちに火をつけました。

その後、フラワーアレンジを勉強し、カットフラワーアドバイザーの資格を取得することで、花業界を農家目線だけでなく、逆方向からも見えるようになりました。

現在はJA花き部会の役員や地域の役員を務めさせて頂いており、この若い時の経験や想いを生かしていきたいです。

2. 農業経営の特徴

私は常々、物事を色んな角度から見る（考える）

農業経営の概況

○作付品目と面積	
スターチス	50 a
カスミソウ	10 a
小菊	3 a
小玉スイカ (スターチス裏作)	50 a
○労働力	
家族	4人
雇用	3人

ように心掛けており、分からない事や知らない事は分かるまで調べ、勉強しています。今でこそ、インターネット等で簡単に情報を得ることができる時代となりましたが、昔は情報源が少なく、県の普及指導員やJAの営農指導員、そして農家の諸先輩方に無理難題を押し付けることも多かったです。現在は、その当時の感謝やお返しも含めて、県やJA、そして地域の方々に対して、相談に乗ることや、協力を積極的に行うように努めています。

私の夢は、あまり大きな夢とは言えないかも知れませんが、その時々課題を適切にクリアしながら、人生を送れたらいいなと思っています。

農業は作業も忙しく、大変な事も多いですが、『趣味が仕事』っていうのが理想なのかも知れませんが、

3. 今後の経営方針

これからも、続くかぎり今のスタンスを維持していきたいです。

この歳になり海外に行くのは難しいですが、国内の産地を巡り、たくさんの勉強をしながら、人とのつながりも増やしたいと思っています。

日高地方のスターチス生産量は今や日本一となり、責任産地となりました。しかし、近年ではメインの販売先がお花屋から量販店へと移行していく中で、単価は低下してきました。そのため、部会の取り組みでは仏花用途だけではなく、他の用途を提案して消費を拡大したいと思っています。

しかし、スターチスは花束やアレンジには使用しづらい花となっている現状であるため、主力産地である和歌山から強くPRすることにより、消費に繋がってきたいです。現在は「スターチスだけのナチュラルスワッグ」を考案してPRに取り組んでいます。

今までにも、花育活動の一環で、スターチスを使用したアレンジ制作の授業をおこなったり、全国的なフラワーアレンジコンテストでは「スターチスが主役のアレンジ」を考案し、3度出品しました。

4. おわりに

最近、フードロスという言葉がよく耳に入ってきます。(花は「フード」ではありませんが・・・)この「フードロス」という言葉を聞けば、「もったいない、減らさなければ」と皆が思うはずですが、しかし、この「ロス」を減らすために農産物の仕入れを減らされたら、農家はたまったものじゃないです。

昔、「日本で花を一番消費しているのは花屋さん」という笑い話をよく耳にしました。例えば、「1本50円で仕入れた100本の花を1本100円で80本売れば、売れ残りはロスとみるか、ディスプレイ代とみるか？」どうかだと思っています。

関税がなくなり、外国から安い農産物がたくさん日本に入ることにより、農産物価格は下がりますが、生産経費は年々上がっています。私は、「このフードロス削減を言うのなら、農産物に適正な価格を付けろ！」と思います。価格が高ければ、ロス率は少なくなるはず。

物事を考えるとき、視野を広げて見ないと取り残される業種が出てきますので、私は視野が狭くならないように、迷わないように、今後も人生の道、「農道」を進んでいきます。



花育（フラワーアレンジ教室）



スターチスだけのスワッグ展示

今後も楽しく農業をしていきたい！

田辺市 指導農業士
橋 坂 佐都美



1. はじめに

私は、農家の娘ですが、農業の事は何も知らず、農業を手伝ったこともありませんでした。22歳の時に結婚し、父が病弱でしたので、結婚して2～3年経ったころ、夫が父母と農業をすることになりました。そのころ私は子育てに専念し、結婚して10年くらい経ってから本格的に農業を手伝うようになりました。

ただ当時は何をしていいかわからず、近所の人達と話をすることもほとんどなかったので、1日が大変長く感じました。

農業を始めた頃は、我が家は早生みかん園ばかりでした。昭和54年に私の住む田辺市上芳養地域内の農地開発事業でパイロット園が出来たので、入植して梅を植えました。みかんの価格は低迷していたので、みかん畑の一部や水田にも梅を植えました。

平成元年にもパイロット園が出来、入植して梅を植えました。さらに残っていた水田もすべて梅園にしました。

2. 農業経営の方針と状況

昭和54年に入植した梅パイロット園に隣接したスプリンクラー設備のある園地を約15年前に購入し、その園地に園内道を整備して、作業がしやすくなるよう園地改造しました。また、収穫前にできるだけ草刈りをしなくてもいいように、ヘアリーベツ

農業経営の概況

○作付品目と面積	
梅	230a
南高梅	220a
小梅	10a
柑橘類	
極早生（日南）	10a
早生（宮川）	53a
晩柑	15a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用（収穫時）	2人

チ等による草生栽培に取り組み、草刈り作業の軽減に努めました。

梅は完熟梅を収穫し、選果作業では、選果機に昇降機やローラーコンベアをつけて、作業が楽になるようにしました。収穫量全体の約7割は加工用の梅として、JAへ出荷しています。残りの梅と小梅は漬け梅にしてハウス内で夏干しや春干しを行い、一次加工しています。

老木や収量の少ない樹は、一度に改植するのではなく、数本から数十本ずつ、夫が接ぎ木して育てた苗木を植えています。

苗木づくりは、自分の園地で比較的収量の多い成木の穂木をとり、毎年接ぎ木して育てています。また、パイロット園で20aほど、手でかん水をして

いる園地があるので、今回、JAの補助事業を活用して、かん水目的のスプリンクラーを設置することにしています。

柑橘については、極早生の「日南」をすべてJAに出荷しています。また、早生みかんはほとんどが個人宅配です。梅の価格が安定しているので、梅への転換も考えていますが、家族経営では、労力に限界があるため、園内道を整備した作業のしやすい園地を中心に改植を進めています。

最近、鳥獣被害が多く、電柵を設置したり、わなを設置して対策していますが、5～6年前から猿の被害も見られるようになり、こまめに園地を巡回するようにしています。

9年前から娘もいっしょに農業をしてくれている



みかんの摘果作業



干し梅のタル詰め作業

ので、薬剤防除や施肥、草刈りは夫、柑橘の摘果や梅のタル詰め、税金の申告は私、梅の収穫や干し作業は娘というように作業効率を考えて役割分担を行い、労力配分することを心がけています。平成12年に家族経営協定も締結しています。

3. 今後の経営方針

梅は、計画的な改植によって、収量を増やし、JAへの加工用梅の出荷に重点を置いていきたいです。梅干し作業については、夏干しだけにして労力軽減を図りたいと思います。

また、早生みかんの宅配は、年々注文が多くなってきているので、安定した収量を確保するため、摘果等の隔年結果対策を行い、注文量に答えられるようにしていきたいと思います。みかんの宅配は気を使いますが、自分で価格を決めることができるのが魅力の1つです。

梅も柑橘も100%納得の出来る物がなかなか出来ず、毎年反省することばかりですが、常に省力化や労力軽減を考え、栽培方法を工夫しながら、「来年こそは良いものを作ろう」と思うことが現在の経営の原動力になっているように思います。

4. おわりに

気がつけば、私も65歳になり、指導農業士の定年を迎える年となりました。農業士の仲間に入れていただき、楽しい時を過ごさせてもらい、農業やそれ以外の事もいろいろ教わり、ありがとうございました。いつまで農業を続けていけるか分かりませんが、やれるところまで頑張ろうと思います。

コロナ禍で、人に会うのも大変な時ですが、こんな時だからこそ仲間のことを思い、大切にしていきたいと思います。

農業に懸ける想い

挑戦心をいつまでも ～より良い品質に向けて～

和歌山市 青年農業士

辻本 晃 啓



1. はじめに

私は農家の長男として育ち、小学校の頃から漠然と農業を継ぐものだと思っていました。大学卒業後は県外で就職し、28歳で実家に戻り就農しました。就農当時は、父に教わりつつ、周辺農家やJAわかやま青年部の方々から刺激を受けながら、栽培技術を学んでいきました。

経営は秋冬ダイコンとニンジンの二期作が主力となっており、コマツナはダイコン、ニンジンの収穫後に作付けし、年間計4回収穫します。

2. 農業への想い・取り組み

近年、ダイコン、ニンジンの価格がやや低価格が続いています。また、異常気象により栽培管理も難しくなっているように感じます。このような中、私は「どのようにして秀品率を上げることができるか」ということを「やりがい」として、農業経営に日々、試行錯誤しながら取り組んでいます。高品質を目指しつつ、年々変化する環境に対応するため、施肥など栽培管理の見直しや、品種の選定、試験を自ら行っています。

経営面では、毎年目標を定めた経営計画づくりと、その結果に基づいた改善策の考案を行うようにしています。その一環として、最近では農作業の省力化を進めるため設備投資を行い、施肥を一人でできるよう肥料散布機を導入しました。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
ダイコン	100a
ニンジン	80a
コマツナ（ハウス）	2a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用（収穫時）	3人



コマツナ栽培ハウス



肥料散布機

最後になりますが、私は、良い野菜、おいしい野菜を消費者に提供し続けるために、いつまでも農業に対しての初心を忘れず、「やりがい」と「喜び」を感じながら、野菜と向き合い続けていきます。

農業に懸ける想い

管理会計で確かな判断を

岩出市 地域農業士

勢田 幸治



1. はじめに

私は、兼業農家の次男として育ち、サラリーマンを15年経験した後、2009年に実家の農地を預かり就農しました。

当初は父が栽培していたイチジク20aを引き継ぎ、色んな品目にチャレンジしながら、品目選定を行い経営拡大をしてきました。

2. 農業への想い・取り組み

就農当初から、とにかく栽培技術獲得と栽培面積の拡大に取り組み、販路も開拓していく中で、色々迷う事も多くなっていたところ、2018年に和歌山県主催の農業MBA塾に入塾させてもらい、農業経営について勉強しました。そして管理会計の重要性を感じ、パソコン教室にも通いExcelで管理システムを作り、日々の仕事のデータを取り、数字が見える事で、経営の判断を行うという事に取り組んでいます。

収益性の悪い品目を、思い切って作らない事で家族との時間に余裕ができたり、新しい販路開拓の時間に使えたりしているので、大変良かったと感じています。

自分が育てた作物をどう売りたいのか？誰に届けたいのか？まだまだ課題は多くありますが、きちんと利益を確保し、家族や仲間との時間も大切に出来るような農業経営を行うことで、次世代の農業者に「農」を繋いでいきたいと思っています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
イチジク	55a
キウイフルーツ	7a
サトイモ	40a
水稻	230a
○労働力	
家族	2人
常時雇用	1人
臨時雇用	4人



収穫作業の様子



管理作業の様子

農業に懸ける想い

なんでも楽しいほうがいい

橋本市 青年農業士

尾崎 正和



1. はじめに

高校卒業後から就農し、父母、祖父母とともに柿を中心に露地野菜と水稻を加えた経営に取り組んできました。SS等の導入による省力化と楽しい農業を目指しています。

2. 農業への想い・取り組み

就農して20年を迎えようとしています。これまでを振り返ると楽しいといえる農業ができていなかったと思います。原因の一つに自分自身が明確な目的もなく、只々目の前の作業を行ってきたに過ぎないからです。

8年前に父親が他界したときも、父親が守ってきたものを維持することを考えるだけで精一杯でした。その後2年は現状維持だけを考えてやっていました。しかし、このままでいいのか？と疑問がわいてきました。

自分自身がやりたいことをせずに、父親と同じやり方を続けるのは何か違うのではないのか、自分自身や家族の時間を持つことも大切ではないだろうか？それから仕事の無駄な部分を見直し、必要なものとそうでないものを分け、優先順位を明確にして行動に移すように変えました。

そうして気持ちに余裕が出てくると、目的を見つけて目標を設定することもできるようになりました。

目的	楽しく仕事をする。
目標	売上1.5倍にする。

3年前には目標を達成し、順調に売り上げも増えていっています。

現在も目的は変わらず「楽しく仕事をする」、目

農業経営の概況

○作付品目と面積	
柿 極早生	30a
刀根早生	230a
平核無柿	50a
富有柿	10a
水稻	70a
採種エンドウ	10a
○労働力	
家族	3人
季節雇用	5~8人

標は「新しいことへのチャレンジ！」です。これからも適度に遊んで楽しい農業をしていきます。



SSによる柿園の防除作業



モアによる柿園の除草作業

農業に懸ける想い

みかんとイチゴの複合栽培

広川町 青年農業士

浦 将也



1. はじめに

私は、平成17年に就農しました。そして、平成28年に青年農業士に認定されました。

家ではみかん、イチゴ、水稻を栽培しています。

2. 農業への想い・取組

私は、子供のころから農業と共に育ってきました。まだ、その時は農業の仕事はきついなど悪い面しか知らず、正直農業が好きではありませんでした。

また、年を重ね、家業を継ぐという事が現実味を帯びてくるにつれて、農業をやっていくことへの不安やうまく農業が出来るのかと悩むこともありました。

しかし、周りの人の助言や手助けのおかげで、まだ一人前とはいえませんが徐々に出来るようになってきました。

出来るようになっていくにつれて農業の良い面もわかってくると、意欲が湧き大事にしたい仕事になってきました。私の家は主にみかんとイチゴを作っていますが気象条件や病気に弱いイチゴをいろいろ調べたり仲間に聞いたりしながら、悩みながら工夫を重ね、育てていくのが楽しくなってきました。

気温・天候・品種の違いなどもありますが、人の考え方も違ってきています。いきなり今の時代のや

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	200a
イチゴ	10a
水稻	50a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	5人

り方にするのではなく、今までやってきた良いところを残しつつ、その時に合った最善の方法近づけるように、試行錯誤しながら日々がんばっています。

最後に、現在はみかんを主に栽培していますが、今後はイチゴの栽培面積を増やしていきたいと考えています。



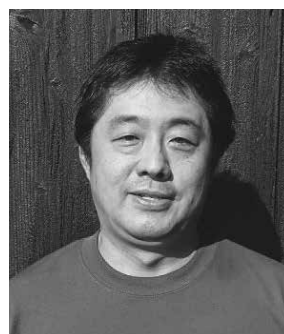
葉かき作業

農業に懸ける想い

すべてが加速していく世の中で

御坊市 青年農業士

黒田 誠 司



1. はじめに

私は、福祉関係の専門学校を卒業後、みなべ町の特養老人ホームに就職、約4年半勤めたのち、平成21年から家業を継ぐ形で就農しました。右も左も分からない中で父や祖父に教わりながら、ピーマンやスイートピー、スイカの栽培方法を学んでいきました。そのうち何か新たに挑戦したいと思い、7年前からスイートピーに代わる品目として、ミニトマトを作り始めました。

2. 農業への想い・取り組み

毎年、収穫できる喜びを噛みしめると同時に、作物をつくることの難しさを感じています。品質の向上や効率化を図りながら、ヒートポンプなどの導入でコスト削減に取り組んできました。将来的には、WordpressをはじめとしたWebを使ったPR、インターネット販売にもチャンスを広げていければと思っています。地域活動では、学童農園の運営に参画し、田植えや稲刈りを通じて小学生の皆さんに食と農の大切さを学んでもらっています。今後、農業分野においてもハイテク化が進み、変化するスピードはこれまで以上に加速していきそうですが、まずは自身の置かれた環境の中で、花を咲かせ実をつけ続けることができるように取捨選択を見極めていきたいと思っています。農業を取り巻く環境は厳しいながらも、健康であれば一生続けることができる職であり、それは同時に私自身これからの生き方の課題であるともいえそうです。まだまだ未熟者ではあ

農業経営の概況

○作付品目と面積	
ミニトマト（アイコ）	8a
ピーマン	15a
水稻	80a
○労働力	
家族	3人



ミニトマトのパック詰め作業



アイコの栽培状況

りますが、息子二人を大事に育てつつ自分のやりたいことを織り交ぜながら、健康第一に前に進んでいきたいものです。

農業に懸ける想い

自分の農業について

田辺市 青年農業士

中山 雄史



1. はじめに

私は就農して17年目になります。大学を卒業後、就農しました。

今回、これまでの農業を振り返り、改めて自分の農業について思うことや考えをまとめたいと思います。

2. 農業経営への想い・取り組み

私の農業は、早生みかん、晩柑類、梅の複合経営です。

作付面積としては、十分な農地を有していますが、就農当初より、老木園の改植や園地改造、園内道の整備を行ってきたため、若木が多く、収益の上がない園地が多くなっています。

作業はすべて1人で行っているため、今後も効率化や省力化を進めていきたいと思っています。

私が自分の経営の中で、特に力を入れていることの1つに草生栽培があります。梅では、ヘアリーベッチなどの緑肥の施用、柑橘では、除草剤を使わないで栽培しています。草刈り作業などの労力は増えますが、肥料の流亡を防いだり、圃場の保水性を高めるなど、栽培土壌の環境改善にもつながっていると思います。

また、その他の取り組みとして、早生みかんでは、マルチ栽培を行い、品質の高いみかん作りに取り組んでいます。

私の住む、田辺市上秋津地域でも、他の地域と同様、農家の高齢化や担い手の不足、またそれに伴う耕作放棄地の増加等が課題となっています。

私が農業士になって思うことは、このような課題

農業経営の概況

○作付品目と面積	
早生みかん	70a
晩柑	60a
梅	40a
○労働力	
家族	なし
臨時雇用	なし



改植した梅畑



温州みかんのマルチ栽培

に対して農業士として、「何かできることはないか」ということです。

今後は、上秋津地域の農業士が一丸となってこうした課題に真剣に取り組んでいくことが大事ではないかと考えています。

農業に懸ける想い

地域農業を守りたい

新宮市 東牟婁農業青少年クラブ

瀧谷 弦



1. はじめに

私は、三重大学を卒業後、地域活性化等のソーシャルビジネスに興味があったので、長野県で緑のふるさと協力隊や三重県で柑橘等の農業法人を経験し、平成29年に実家（新宮市佐野）の農地を引き継いで就農しました。就農4年目で、なす等の露地野菜を栽培しています。

2. 農業への取り組み・想い

なす栽培では、2年目から「くろしおナス組合」に入り、栽培・出荷検討会や研修会に参加してきました。検討会や研修会を重ねることで情報収集をし、自分でもいろいろ栽培方法を試すことで高品質化や多収化につなげて所得を上げていきたいです。なす以外にもとうもろこしやキャベツ、ブロッコリー、えだまめ、たかな、えんどう、しゅんぎく等の露地野菜を多品目栽培しています。収穫後はセスバニア、ソルゴーやひまわり等の緑肥作物を播いて土づくりに努めています。

また、耕作放棄地対策にも興味があったので、高齢で農業ができなくなった人から依頼された農地を耕作し、栽培面積を少しずつ増やしています。

栽培技術を学んでやってみてうまくいったときは、やりがいを感じますが、この地域は台風や大雨が多いので被害を受けてがっかりすることもあります。

現在の目標は、ほぼ1人で農作業をし、労力的にギリギリの状態なので、経験を積んでももう少し余裕

農業経営の概況

○作付品目と面積	
なす	8a
とうもろこし	10a
キャベツ	10a
その他（露地野菜）	100a
○労働力	
本人	1人



なすの整枝作業



くろしおナス組合の現地検討会

を持って農業をすることです。また、もともとソーシャルビジネスに興味があったので、これからも耕作放棄地対策等を考えながら農業をして、地域活性化に貢献していきたいです。

県農林大学校学生です。

～農林大学校1年生の自己紹介&近況報告(第1回)～

(農学部 園芸学科)



有田大記

私の名前は有田大記です。出身は和歌山市です。私が農大に入学したのは農業をもっと学びたいと思ったからです。私が農業と出会ったのは高校の時です。私の通っていた高校は農業高校で、その高校の授業で初めて農業に出会いました。高校で農業を学んでいく過程で農業の良さを知り、農大でさらなる知識と技術を学びたいと思い農大に入学しました。

私は将来、農業に携わる仕事に就きたいと思っています。そのために農大で学べる知識や技術を学べるだけ学びたいです。



私の名前は有本那智です。出身は和歌山市です。私が農大に入学したのは、新しい道に進みたいと思ったからです。私が農業に出会ったのは、テレビです。ある時、農業を特集していた番組があり、それを見て農業に興味を持ち、和歌山の中で農業を学べる所はないかと探しているところ農大と出会い入学することに決めました。

私は将来、農業に携わる仕事に就きたいと思っています。非農家ということもあり、いろいろと大変なことが多いですが、2年という短い期間の中で、多くの知識と技術を得たいです。



有本那智



植田康太

私は、紀の川市に住んでいる植田康太といいます。

自分が、農大に入学した動機は、まず1番目は、家族が農業を営んでいて、自分もその農業に興味を持ったからです。高校も農業系の高校に通ってました。その高校で、より農業について知りたいと思ったので、農大へ入学することにしました。

将来の夢は、自分はまだはっきりと決まっているわけではないですが、いずれは親の農業に就くでしょう。そのために、農大に入ったからには、より専門知識を身につけ、将来役立てるようにしたいです。

私は兵庫県神戸市出身です。家は非農家なのですが、祖父母が小さな畑を持っていて、幼少期からそこで遊んだり、収穫を手伝ったりするのが好きで一度深く学んでみたいと思っていたので和歌山県農林大学校に入学しました。卒業後の進路についてはまだ決まっておらず迷っているのですが、今自分が専攻している果樹コース以外の基礎的な知識や危険物（乙種4類）などの資格も必要になったときに生かせるようしっかり学び将来に役立てられるようにしたいです。



奥山 智成



下村 梨乃

私は大阪府富田林市から通っています。高校で農業を1年間学び、もっと知りたいと思い農大に入ることを決めました。色々なところにオープンキャンパスに行きましたが、農大の先生方の対応や育てたい作物が沢山あり入学を決めました。この学校で資格取得に励み、実習では気になることは先生に聞いて普通に受けるよりもいい学びができるようにしたいです。そして卒業後は桃農家さんのところに就職して桃のパフェやピーチティーなどを販売しているカフェを開きたいです。生産から販売まで全て自分でしたいです。そのためにもインターンシップも真剣に選び、積極的に学んでいきたいです。そして将来のカフェの経営のためにアルバイトとしてカフェで働いてみたりカフェ巡りをしたり、経営している方の講演会などがあれば行きたいなと思っています。



私は、岩出市出身で和歌山県立紀北農芸高等学校を卒業しました。農林大学校に入学した理由は、高校で学んだことをより深く専門的に学びたいと思い入学しました。

高校生の時に亡くなった芸能人の方のお葬式をテレビで見て素敵なお祭壇だなと思い、将来私もこの仕事に携わりたいと思いました。そのためには、お花のことについてより詳しく学び、さらに技術を高めていきたいです。そして、農林大学校で取得できる資格をたくさん取得していきたいです。



鈴木 瑞穂



鈴木 幸羽

私は和歌山市出身で、紀北農芸高等学校に通っていました。幼い頃から植物が好きで、高校では花卉コースで主に鉢花を栽培していました。将来は花に携われる職業に就き、沢山のの人に花の魅力をもっと知ってもらいたいと思い、多くある職業のなかでも花屋について興味をもちました。和歌山県農林大学校ではたくさんの切り花について学べる事を知り、進学を決めました。

農林大学校での2年間で切り花の栽培技術や販売に関する知識を身につけて将来に生かせるように頑張りたいです。



田中壮真です。出身は兵庫県の西宮市です。西宮市は甲子園などがありとても良い所だと思います。長所は元気で明るい所で、短所はのんびりな所だと感じます。

なぜ農大に入ったのかと言うと、オープンキャンパスに行った時、偶然自分の通っていた高校の先輩がいました。話を聞いてみるととても楽しそうだと思い受験しました。

将来の進路はまだあまり考えてないけど、農業法人に就職したいなと思っています。自立経営農家は、一人で大きな土地で作物を作るのはちょっとしんどいと思いあきらめました。

農大で頑張りたいことは、実習では休む時は休んで、動く時は効率よく作業をすることです。先輩達とももっと話ができるようになりたいです。



田中 壮真



谷 脇 悠 真

私は、海南市出身で、高校は有田中央高等学校で農業系列を選択して農業について2年間学んでいました。私がなぜこの農大に入ったかと言いますと、祖父母がみかん農家で親戚や親が継がなかったので僕が後継者になりたいと思い有田中央高等学校を卒業した後に継ごうと考えましたが、まだまだ農業の知識や技術を身につけたいと思って農大に入学しようと思決意しました。将来の夢は、祖父母のみかん栽培を継いで、おいしいみかんを全国に届けられるようにしたいと考えています。そのために和歌山県農林大学校でみかんの他にさまざまな知識や技術を身につけたいです。

試験研究レポート

REPORT

業務用ナバナの連続収穫技術

農業試験場 栽培部 研究員 嶋本旭寿

1. はじめに

和歌山県では平成24年から食用ナバナの業務向け栽培が行われています。一般的に、ナバナは紙包装やパック詰め出荷されますが、業務用ナバナはコンテナにバラ詰め出荷されるため、出荷調整が容易で、生産規模の拡大が可能です。

しかし、ナバナは頂花（主茎が抽苔し、先端に蕾をつけたもの）の収穫から側枝の収穫までに数週間かかることから、収穫期間中の収量が大きく増減します。収穫できない期間がある一方で、ピーク時には収穫が間に合わず、規模拡大するうえでの課題となっています。

そこで、収穫期間中の収量を平準化するための連続収穫技術の開発に取り組みました。主力品種である‘CR花かんざし（丸種種苗）’の播種日や他品種との組み合わせについて検討しましたので、ご紹介します。

2. 試験研究の内容・結果等

1) 播種日の検討

‘CR花かんざし’を1週間ずらして播種したところ、収穫開始日が約3週間遅れました。収穫期間が短かった分、規格品収量は減少しました（表1）。

2) 品種の検討

‘CR花かんざし’と同日播種で収穫ピークを分散できる品種（供試品種数6）について検討したところ、‘CR華の舞（丸種種苗）’が有望でした。‘CR華の舞’は‘CR花かんざし’と比べて、収穫開始日が3週間遅れました。‘CR華の舞’は収穫期間が短いものの、秀品率が高く、規格品収量が多いです（表1）。また、花蕾のボリュームがよいことから、‘CR花かんざし’と同等以上の品質です（写真1）。

表1 収穫期間および収量

品種	播種日	定植日 ^Z	収穫開始日 ^Y	収穫終了日 ^X	1株あたり収量(g/株)		秀品率 (%)
					規格品	規格外品	
CR花かんざし	9月11日	10月3日	12月8日	2月28日	198.1	70.3	74
	9月18日	10月15日	12月27日	2月28日	167.3	67.6	71
CR華の舞	9月11日	10月3日	12月29日	3月2日	214.8	26.5	89

Z: 128穴セルトレイで育苗し、3.5葉期に定植

Y: 調査株の頂花が収穫された日の平均値 (n=10)

X: 規格品1本の平均重量が4gを下回った日



写真1 ナバナ規格品
上は‘CR 花かんざし’、下は‘CR 華の舞’

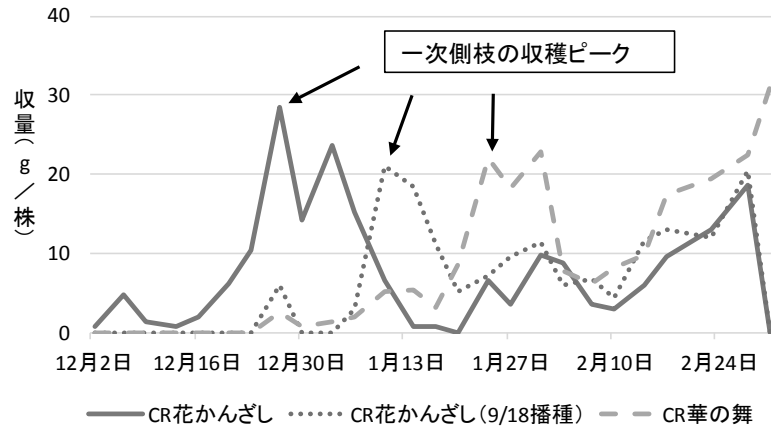


図1 一次側枝の収穫ピーク

3) 連続収穫が可能な組み合わせ

‘CR 花かんざし’ と ‘CR 華の舞’ を同日播種するとともに、‘CR 花かんざし’ を1週間ずらして播種することで、一次側枝の収穫ピークが2週間毎となります(図1)。この組み合わせでは、‘CR 花かんざし’のみと比較して、総収量および粗収益はほぼ変わらずに、収穫期間中の収量を平準化することができます(図2)。

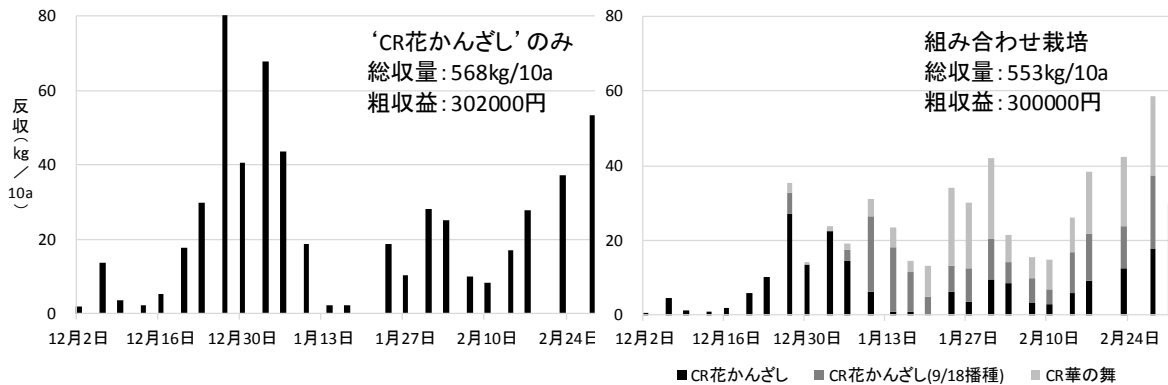


図2 時期別収量

左図は‘CR 花かんざし’を10a(2,857株)栽培した場合、
右図は組み合わせ(3種×952株)栽培した場合
粗収益は令和元年度産の月別契約単価をもとに算出

3. おわりに

今回ご紹介した連続収穫技術は、収穫ピーク時の収穫もれを防ぐことができるため、増収および生産規模の拡大が期待できます。しかし、令和3年度現在、JAが取り扱う業務用ナバナ品種に‘CR 華の舞’は含まれていません。栽培を検討される方は、事前にお近くのJAにご確認をお願いします。また、‘CR 花かんざし’の播種日をずらして栽培する際には、定植日もずらすようご注意ください。

試験研究レポート

REPORT

モモ新品種「さくひめ」の生育特性および収穫適期について

果樹試験場かき・もも研究所 主任研究員 堀田 宗幹

1. はじめに

モモ「さくひめ」は国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構により育成され、2018年に品種登録された新品種の早生モモです。肉質は溶質で早生品種としては糖度が高く核割れが少なく、有望品種として期待できます。「さくひめ」にはブラジルの品種が育種親に入っており、従来の早生品種にない特徴を持っています。当研究所では、本県での「さくひめ」の生育特性や収穫適期について調査を行いましたので紹介します。

2. 特徴

大きな特徴としては、低温要求性が低いため、発芽や開花が従来品種に比べ早いことが挙げられます。2018～2021年までの4年間平均をみると、早生の主要品種である「日川白鳳」に比べ発芽期は22日早く、開花始期は9日早い状況でした。収穫始期は「日川白鳳」と同等ですが、収穫期間が長く収穫終期は「日川白鳳」より5日遅くなりました（表1）。これは、「さくひめ」では核割れが少なく成熟が緩やかであることが要因です。

所内調査樹における果実品質を表2に示します。果実重は約300gで「日川白鳳」と比べると2階級ほど大きく（写真1）、糖度はほぼ同等で、年によっては酸味が感じられる果実もあります。双胚果は多い（多い年には50%）ですが、核割れ果の発生は少ないです。

表1 「さくひめ」の生育概要（2018-2021年）

品種	年次	発芽期	開花			収穫		
			始期	盛期	終期	始期	盛期	終期
さくひめ	2018年	--*	3/19	3/22	4/1	6/18	6/21	6/25
	2019年	2/14	3/20	3/22	3/30	6/20	6/23	7/1
	2020年	2/10	3/13	3/17	3/26	6/16	6/22	6/30
	2021年	2/6	3/12	3/15	3/20	6/16	6/20	6/28
	4年平均	2/10	3/16	3/19	3/27	6/17	6/21	6/28
日川白鳳	2018年	--	3/27	3/30	4/6	6/13	6/15	6/18
	2019年	3/5	3/29	3/31	4/11	6/19	6/21	6/24
	2020年	3/3	3/28	3/31	4/7	6/19	6/22	6/26
	2021年	3/5	3/24	3/27	4/4	6/19	6/21	6/25
	4年平均	3/4	3/27	3/29	4/7	6/17	6/19	6/23

※ --は調査していないことを示す

表2 「さくひめ」の果実品質（2018-2021年）

品種	年次	果実重 (g)	果肉硬度 (kg)	糖度 (Brix%)	酸度 (pH)	核割れ果率
さくひめ	2018年	310	2.2	10.8	4.2	15%
	2019年	299	2.4	13.5	4.5	8%
	2020年	293	2.1	12.4	4.4	19%
	2021年	344	2.1	13.3	4.3	15%
	4年平均	312	2.2	12.5	4.3	14%
日川白鳳	2018年	190	2.4	11.7	4.3	100%
	2019年	233	2.5	12.2	4.5	100%
	2020年	249	2.3	12.0	4.4	95%
	2021年	230	2.2	12.5	4.5	83%
	4年平均	226	2.3	12.1	4.4	95%



写真 1 4kg 箱での「さくひめ」(左)と「日川白鳳」(右)の荷姿

3. 収穫適期について

「さくひめ」は樹上での果実の保ちがよく、従来の早生品種とは収穫適期の見極めが異なります。表3は熟度の目安別に果実品質を調査したものです。従来の「日川白鳳」の収穫適期が『熟度1』ですが、「さくひめ」では熟度1では果実糖度や果汁 pH がやや低く、酸味が感じられました。一方、果実を指で押して戻らない程度に軟化した『熟度3』では糖度、果汁 pH とともに最も高く、食味も最良でしたが、果肉硬度は最も低く、果梗周辺の枝押せ傷が発生したり、果実に指痕が残る等、出荷できない果実が増加しました。食味や出荷可否を考慮すると、果実を指で軽く押し弾力を帯びる『熟度2』が収穫適期と考えられます。さらに熟度2の果実を常温保存し果肉硬度の変化やエチレン発生等を調査したところ、「日川白鳳」と同等以上の日持ち性が認められました(データ略)。

表3 「さくひめ」の熟度別果実品質(2019年)

熟度 ^y	収穫日	果実径(mm)		果実重 (g)	果肉硬 度(kg)	糖度 (Brix%)	酸度 (pH)	みつ症 程度 ^x	雑味 ^w	果実外観 ^v	
		縦	側							果点程度	着色歩合
1	6月17日	77.9 a ^z	79.6 a	253 a	2.7 a	12.5 a	4.3 a	0.1	0.1	1.4	1.5
2	6月21日	79.8 a	83.3 a	284 a	2.5 a	14.4 ab	4.4 ab	0.6	0.3	1.9	2.5
3	6月25日	82.4 a	85.9 a	313 a	1.8 b	15.5 b	4.5 b	1.3	0.2	1.8	2.9

z: Tukey-Kramerの多重比較検定により、異符号間には5%レベルで有意差あり

y: 熟度1(従来の「日川白鳳」収穫適期外観)、熟度2(果実を指で軽く押し弾力を帯びる時期)、熟度3(果実を指で押して戻らない程度に軟らかくなる時期)

x: 発生程度を0(無)~5(甚)で評価

w: 甘み、酸味、渋み以外の食味を損じるものを0(無)~3(甚)で官能評価

v: いずれも無: 0, 果実表面積の1/4未満: 1, 同1/4~1/2: 2, 同1/2以上: 3で評価

4. 栽培上の留意点

前述のように「さくひめ」は低温要求性が低く従来品種に比べ発芽、開花とも早いため、冷気の滞りやすい園地等では凍霜害のリスクが高くなる恐れがあります。発芽前や開花期の防除については、従来品種より前進することを心掛けて作業を行います。また、せん孔細菌病には罹病性であるため、通常の防除対策が必要であるとともに、風当たりの強い園地など発生が多い園地では植栽を避けるほうが良いと思われます。

着果管理について、従来品種に比べ発育が早いので、先駆けて作業を進めます。自家和合性のため人工授粉は必要ありません。従来品種に比べ開花前に葉の発育が進むため、摘蕾・摘花時に葉芽を欠かないよう注意します。双胚果が多いですが、双胚が核割れに直結しないので、双胚にかかわらず摘果を行います。

試験研究レポート

REPORT

絶滅危惧日本鶏「龍神地鶏」を基にした 新たな地鶏品種の開発

畜産試験場養鶏研究所 主査研究員 湯橋 宏美

1. はじめに

本県田辺市龍神村では、明治以前から他の日本鶏品種と交わりがない貴重な固有品種「龍神地鶏」が飼育されています。しかし、限られた地域で長い間繁殖が繰り返されてきたため、近親交配が進み個体数が減少し、絶滅が危惧されていました。近年、全国で地域に根付いた「地鶏」を活用したブランド品が注目を集めています。そこでこのことを利用し、龍神地鶏を基にした県特産地鶏品種を開発することにより、龍神地鶏を恒久的に保存し、かつ、地域振興につなげることを目指しました。

2. 試験研究の内容・結果等

研究では、龍神地鶏（雄）と商用品種（ロードアイランドレッド雌、岡崎おうはん雌）の2品種と掛け合わせ、新品種を作り、成績が優良な掛け合わせを普及用品種としました。

結果、雌での平均産卵率、日産卵量は、ロードアイランドレッドとの掛け合わせによる品種の方が良好な成績でした（表1）。雄では、いずれの掛け合わせでも体重がのらず、産肉性能に課題が残りました（表1）。以上の結果から、ロードアイランドレッドとの掛け合わせを卵用の普及用品種としました（図1）。

普及用品種の鶏卵は薄い褐色で卵重 42.2g（図2）。鶏卵規格のSSサイズに該当しました。分析では、全卵中の遊離グルタミン酸含量（旨味成分）が一般白色卵よりも高い傾向がありました。卵黄の官能検査では「コク」が一般白色卵より有意に高く、味が濃厚との評価でした（図3）。

また、平飼い飼育では鶏同士のツツキ行動が見られましたが、40cmと120cmの高さに止まり木を設置したところ、ツツキ被害が軽減しました。

表1 交雑種2品種の産卵および産肉性能

	雌の産卵成績			雄の産肉成績		
	産卵率	日産卵量	飼料要求率	体重	飼料要求率	正肉重量
×ロード	78.0%	32.7g	2.49	1673.9g	4.46	601.6g
×おうはん	73.8%	31.9g	2.54	1718.2g	4.69	629.0g



龍神地鶏 雄

×



ロードアイランドレッド 雌

=



普及用品種 雌

図1 普及用品種の掛け合わせ



普及用品種 龍神地鶏 ロトアイトレット 一般卵
 図2 鶏卵の比較

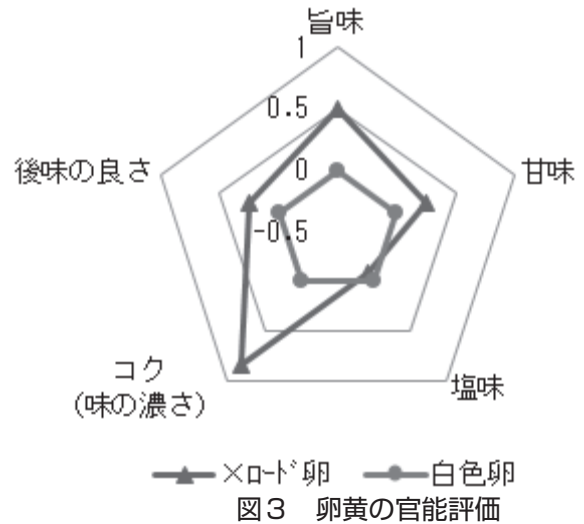


図3 卵黄の官能評価

3. まとめ

「龍神地鶏」を活用した本県独自の地鶏品種が誕生しました。開発した普及用品種は卵用品種で、「龍神コッコ」と名付けられました。令和3年8月から田辺市龍神村の特産品として卵が販売されています。濃厚な味わいでコクがあり、サイズは小振りで卵かけごはんに最適、と好評です。今後は生産者、商工会等で組織された龍神コッコ普及協議会を中心に生産・販売を進めていく予定です。また当所では、新たな肉用地鶏品種の開発も行っており、卵と併せて地域活性に貢献していきたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症に係る誹謗中傷等は許されません！！

和歌山県においても、新型コロナウイルスに対する不安やおそれから、感染者やその家族、医療従事者などへの誹謗中傷等が発生しており、このようなことは決して許さないとの思いから、令和2年12月に「新型コロナウイルス感染症に係る誹謗中傷等対策に関する条例」を施行しました。

県では、誹謗中傷等が発生した場合、条例に基づき、誹謗中傷等を行わないことやインターネット上に投稿した情報を削除することを指導し、従わない場合にはやめるよう勧告を行います。

感染者やその家族、医療従事者はもちろんのこと、病気等によりワクチン接種ができない人等への誹謗中傷等は決して許されず、懲役などの刑事罰が科されたり、被害者から損害賠償請求されたりする場合もあり、行った人自身の人生も変えてしまうことがあります。

不確かな情報や根拠のない噂に惑わされず、誹謗中傷等を行ったりしないよう、人権に配慮した行動をお願いします。



【コロナ差別相談ダイヤル（県人権政策課）】
 TEL 073-441-2563/FAX 073-433-4540
 (受付) 月～金曜 9:00～17:45 (祝日・年末年始除く)

【お問い合わせ先】
 和歌山県人権政策課
 TEL 073-441-2561
 FAX 073-433-4540

普及活動レポート

REPORT

スマート農業の推進に向けて

海草振興局 農業水産振興課

1. はじめに

和歌山県では、農業者の高齢化や労働力不足など、生産現場の課題を解決するため、ロボット技術やICT（情報通信技術）などの先端技術を取り入れたスマート農業を推進しています。

これを踏まえて、海草振興局では令和2年度より県新政策「スマート農業加速化」に係るスマート農業実践塾を開催し現場へのスマート農機の導入を進めています。また、国庫事業「スマート農業総合推進対策事業（次世代につなぐ営農体系確立支援事業）」を活用して、農業用ドローンによる水稲への農薬散布の防除効果、作業の省力・軽労化を検証しました。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

1) スマート農業実践塾（果樹コース）の開催

スマート農業技術の現場導入を加速化するため、スマート農業実践塾を令和2年8月と9月に海南市下津町内の温州みかん園で開催しました。8月には株式会社未来図 藤戸輝洋氏を講師に迎えてドローン操作に係る法令関係と操作方法について講義を行いその後、農業用ドローンによる農薬散布の実演と、空撮用ドローンの操作講習を行いました。また、9月には、株式会社東海近畿クボタ 森友寛氏を講師にリモコン式草刈機とアシストスーツについても操作講習を行いました。本実践塾には下津町内の農業者を中心に延べ35名の参加者があり、実際にスマート農機を操作し体感しました。

参加者からは農業用ドローンによる農薬散布への期待や、リモコン式草刈機が導入できる園地条件の整理が必要等の意見が出されました。

2) 農業用ドローンの導入による水稲の省力的防除

水稲栽培農家の高齢化や、担い手不足が進み防除作業が農家の大きな負担となっていることから、作業の省力・軽労化を図るため農業用ドローンによる防除を検討しました。事業を進めるにあたり令和2年6月に管内市町、JA、農業用ドローンを保有する農家3名を構成員とし和歌山県スマート農業推進協議会を設立しました。



図1 スマート農業実践塾
農業用ドローンについて



図2 研修会



図3 農業用ドローンによる農薬散布

(1) 研修会の開催

海草管内には令和元年に和歌山市と紀美野町の農家がドローンを導入しています。ドローンの使用にあたっては情報量が少なく、手探りで使用していたことから、研修会では「農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」や「農業分野におけるドローン活用事例」等紹介し安全ガイドラインを厳守して事故がないよう説明を行いました。

また、先進的に農薬防除を請け負っている農薬・農機具メーカー、JAから農業用ドローンによる農薬散布事例について講演を頂きました。

(2) 防除効果

農業用ドローンによる農薬散布が水稻への薬剤付着、防除効果、省力効果等について調査しました。

農薬散布状況は散布ムラがあるものの、比較的均一に散布できました。しかし、株元への薬剤付着は少なく、株元に生息しているトビイロウンカには効果が劣りました。そのためウンカ多発年には早期防除と状況に応じて粒剤や手散布による追加防除が必要なことを示唆しました。カメムシ類の防除効果は認められました。

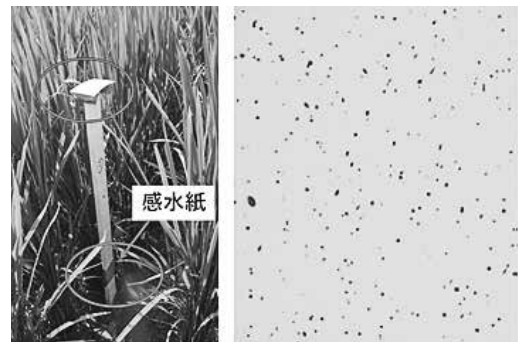


図4 感水紙による薬剤付着調査

(3) 省力効果

区画整備されたほ場では農業用ドローンの飛行は自動モードで使用、中山間地の棚田では不正形なほ場のため手動モードでの使用となりました。省力効果ほ圃場条件により異なりますが、50aの水田を2人で20分程度で終わりました。

3. 今後の取り組み

スマート農業実践塾で紹介したスマート農機を農家が導入するには、まだまだ多くの課題があり、地域の現状に適した農機の検討が必要となります。安価で効率的に使用できる農機を中心に普及を図っていきます。

高齢化と担い手不足が進行する水稻栽培においては、今後、水田を維持していくためには大規模稲作経営体の育成や、関係機関と連携した請負体制の構築が必要となり、農業用ドローンの役割は非常に大きくなると思われることから効率的な防除体系の確立に取り組みます。

桃の産地振興について

那賀振興局 農業水産振興課

1. はじめに

那賀地域は県内一の桃産地であり、特に「あら川の桃」というブランドは京阪神に広く浸透している。しかし古くからのブランド産地であることから老木園が多く、近年の異常気象による風水害に度々襲われ枝折れや倒木等の被害を出している。また、担い手の高齢化が進行しておりそれに伴う後継者不足も深刻である。

更に、平成 29 年にかつらぎ町において発見された特定外来生物クビアカツヤカミキリは昨年のフラズ発見に続き本年度岩出市において初めて成虫が発見されており、桃をはじめとしたバラ科作物に対する脅威がすぐそこに迫っている。

そこで振興局では、ブランド産地を維持するため、老木園の改植による園地の若返り、温暖化等に対応した優良品種の導入と併せて老木園を減らしていくとともに、担い手の確保・育成体制の整備、さらに新たな害虫であるクビアカツヤカミキリの侵入・拡散防止に向けた取組を行っている。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

ア 産地ブランド化に向けた優良品種の導入

県戦略品種である「さくひめ」、「つきあかり」の早期産地化に向けて以の取り組みを行っている。

1) 「さくひめ」 早生種で低温要求量が低いことから安定した開花が望める品種

マニュアル作成に向けた生育収量調査の実施

2) 「つきあかり」 中生種、黄肉で食味が安定し、輸出向けの品種

収穫適期が分かりにくいので収穫適期が判断できる試作果実袋を用いて現地で使用し、使用感や果実品質を調査中。



収穫期のさくひめ



つきあかりの試作袋



慣行の果実袋

イ 桃産地における担い手の確保・育成体制の整備

JA 紀の里では平成 27 年にトレーニングファームを設置して以降、これまで農業次世代人材事業を活用した桃生産者の担い手確保・育成に努めてきたが、令和 3 年 6 月に紀の川市を中心に「紀の川市新規就農

者受入協議会」が設立されたことからそのメンバーとして参画、「わかやま版新規就農者産地受入体制整備支援事業」も活用しながら、新規参加者が抱える問題の一つである住居の確保など、関係機関がより一丸となった担い手の確保・育成に向けた体制づくりを推進している。



トレーニングファームにおける開講式の様子

ウ 特定外来生物クビアカツヤカミキリの蔓延防止

那賀管内へのクビアカツヤカミキリの侵入を監視するため、JA 等関係機関と連携し定点の巡回調査を行った（令和 2 年度 管内延べ 798 地点）。また、市や JA の広報誌への掲載をはじめ、桃生産農家や JA 組合員への防除啓発チラシを配布、林業関係者への訪問、農家等向け研修会の開催等啓発に努めた。

管内では、令和 2 年 5 月に岩出市ではじめて被害樹が確認された。その後岩出市及び紀の川市で被害樹（令和 2 年度 7 園地 15 本）が確認されたが、これまで開催してきた巡回調査や研修会、防除啓発のチラシの配布等により早期発見でき、伐採等の対策がなされていることから、今年度は既発生園やその隣接園でのフラスの発見に止まり、被害拡大は最小限に抑えられている。



巡回調査の様子

3. 今後の取り組み

産地のブランド化を維持・拡大するために、国・県などの補助事業を活用した老木園の改植と合わせて県戦略品種の導入の取り組みを進めていく。

担い手の確保育成体制の整備については、希望者に対する就農相談に対応するとともに、就農に必要な情報提供に努める。また、就農後の定着に向けて引き続き関係機関が連携して取り組んでいく。

クビアカツヤカミキリ蔓延防止については、今年管内で初めて成虫が発生されたが、成虫の発生源が特定できていないことから、成虫発見地域を中心とした定期的な調査や成虫の捕殺等を行っていく。

また農業関係者だけでなく、地域の自治体とも協力した防除啓発に努めていく。

併せて広報誌への掲載、生産者等への防除啓発チラシの配布や研修会の開催、発見した時点での成虫の捕殺など、引き続き関係機関が一丸となり蔓延防止に向けた取り組みを進めていく。

普及活動レポート

REPORT

クビアカツヤカミキリの被害防止に向けた取り組み

伊都振興局 農業水産振興課

1. はじめに

クビアカツヤカミキリは、サクラやモモ、ウメ、スモモなどのバラ科樹木に産卵し、幼虫が樹の内部を食べて枯死させる外来のカミキリムシであり、特定外来生物に指定されています。

当該害虫の被害は全国で拡大しており、伊都地域においても令和元年に県内で初めて被害を確認して以降、急速に被害が拡大し、生産現場では危機感が高まっています。

当該害虫の被害の拡大を防止するため、当課では関係機関と連携を密にした普及活動に取り組んでいます。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

1) クビアカツヤカミキリ防除対策の推進体制

伊都地域では、伊都地域農業振興協議会果樹病虫害防除対策会議（構成員：管内各市町、J A、県かき・もも研究所、農業共済組合、伊都振興局）において、被害調査、防除対策指導及び啓発活動を実施しています。

2) クビアカツヤカミキリの被害状況

伊都地域では、平成 29 年 7 月にかつらぎ町で県内初のクビアカツヤカミキリの雄成虫（図 1）が発見されました。その後、令和元年 11 月にかつらぎ町のモモ園において、県内初のフラス（木くずと虫糞の混合物）を排出した被害樹を確認しました。周辺ほ場において、関係機関とともに侵入警戒調査を実施したところ、令和 2 年 3 月末時点では 7 ヲ所のモモ園、スモモ園において、合計 15 本の被害樹を確認しました。

被害樹を確認して以降、関係機関と協力して被害樹からの幼虫の堀取り、ネット被覆、伐採・伐根及び防除の指導を行いました。令和 2 年 4 月以降はより広い範囲のほ場で被害樹が確認され、令和 3 年 3 月末までにかつらぎ町、橋本市の 46 地点で、スモモ、モモ、ウメの樹種に 183 本の被害を確認しました。その後の調査においても被害は拡大しており、令和 3 年 7 月 20 日までにかつらぎ町、橋本市の 87 地点でスモモ、モモ、ウメの樹種に 347 本の被害を確認しています（表 1）。

3) クビアカツヤカミキリの被害調査

当該幼虫の活動時期は 4 月～ 10 月頃とされており、その間に幼虫は被害樹の内部を食害し、樹から特徴的なミンチ状のフラスを排出します。そこで、被害調査ではフラスの排出された樹の有無を調査します（図 2）。

令和 3 年 6 月の特別警戒調査では、伊都地域の関係機関と県庁各部署からの応援により、4 日間で延べ 160 人がかつらぎ町、橋本市の約 800 園地を調査しました。また、生産者や一般の方から疑似フラスの確認や成虫発見等の連絡があるため、その都度関係機関と調整して対応を行っています。

4) クビアカツヤカミキリの成虫捕殺

当該成虫の発生時期は主に 6 月～ 8 月とされており、この間に成虫が飛散及び産卵し、被害が拡大します。

令和3年度は5月29日～8月5日の間に被害園を関係機関と巡回調査し、75匹の成虫を捕殺しました。

5) クビアカツヤカミキリの防除指導

調査等により被害樹が確認された場合、防除指導として幼虫の刺殺（掘り取り）、スプレー型の薬剤の噴射、ネット被覆と成虫捕殺、農薬の樹冠散布、伐採・伐根をお願いしています（図3、4、5、6）。

これまでにフラスの排出が確認された被害樹347本のうち、177本を伐採しました。それ以外の被害樹については、幼虫の掘り取りとネット被覆の指導を行い、経過観察を行っています。

また、当該害虫の被害を防止するため、研修会の実施や市町・JAの広報による啓発、JAから追加防除の広報を行うなど、関係機関が協力して取り組みを行っています。

表1 クビアカツヤカミキリの被害状況（令和3年7月20日）

市町村名	品目	園地数	被害本数
かつらぎ町	すもも	26	179
	もも	31	105
	うめ	10	27
橋本市	すもも	8	20
	もも	7	9
	うめ	5	7
合計		87	347

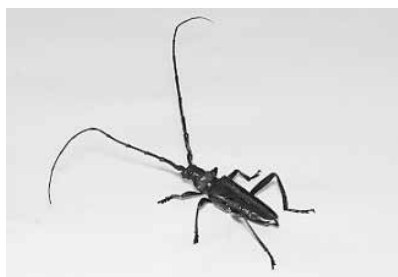


図1 クビアカツヤカミキリ成虫（雄）



図2 被害調査



図3 幼虫の刺殺



図4 薬液の噴射



図5 ネット被覆



図6 伐採・被覆

注) 成虫の飛散防止のため被覆

3. 今後の取り組み

これまでの取り組みにより、クビアカツヤカミキリの被害とその対策について、生産者には一定の周知がされてきたところですが、被害はサクラや一般家庭の庭木にも確認されています。

被害の拡大防止には、被害樹の早期発見と早期対策が重要なことから、今後は一般家庭も含めた啓発活動を行っていく予定です。

普及活動レポート

REPORT

辛味果実の発生しないシシトウガラシ 「ししわかまる」の導入による産地の活性化

有田振興局 農業水産振興課

1. はじめに

有田川町金屋地区では、シシトウガラシの露地トンネル栽培が盛んで、中山間地域を中心に産地が形成され県内第一の産地となっています。

シシトウガラシは辛い果実が発生することがあり、外観からは区別が困難であるため、辛味を気にする消費者や子供からは敬遠され、需要の幅が限定されています。

県農業試験場暖地園芸センターでは遺伝的に辛味成分であるカプサイシンを合成することができない新品種「ししわかまる」を育成し、昨年度品種登録出願をしました。JA ありだ蔬菜部会ししとう部門では育成段階から「特産品にできないか」と注目して、出願公表と同時に「ししわかまる」の生産を開始しました。

農業水産振興課では JA と連携して「ししわかまる」の産地化を推進しています。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

1) 販売面での取り組み

販売開始当初は、従来と同じ出荷規格の透明パックに「辛くないししとう」と書いた短冊を入れて販売しましたが、単価は従来の品種である「葵ししとう」とほぼ同じでした。

そこで、「葵ししとう」と差別化するのに、2L 階級を大パックからミニパックへと新たな規格に変更したところ、価格差が広がり、平均単価で「葵ししとう」を上回るようになりました（写真 1）。

辛味果実の発生しないシシトウガラシは全国で初めてであり、反応を市場に聞き取り調査した結果では、『辛味果実がないので安心感がある』、『30～40代の主婦層がよく購入していく』等、評価が高く、ファミリー層を対象とした外食店でも利用されています。学校給食への供給についても提案されるなど、新たな消費者層をつかみ始めているのではないかと考えています。

一方、スーパー等の売り場では、従来の品種と区別して陳列されていない等の課題も明らかになり、JA が県の補助事業を活用してポスターやミニ幟、ポップを作成し、消費者との接点において「ししわかまる」のコーナーを設けて特徴を理解してもらえよう働きかけ、PR に力を入れています。



写真 1 2Lミニパック

コロナ禍で、店頭での販売促進活動ができない状況が続いていますが、振興局では関係機関と連携しながら、管内の直売所での販売箇所を増やしたり、マスコミに取り上げてもらうよう働きかけるなど、消費者への認知度を上げるための様々な活動に取り組んでいるところです。

2) 収量性を上げるための栽培管理法の検討

管内のシシトウガラシ栽培は、露地栽培が主体で4月に定植し、降霜に遭遇する11月～12月まで収穫が続きます。長い栽培期間に、整枝は混み合った枝を間引く程度で、ほぼ放任に近い管理となっています（写真2）。

従来の整枝法と肥培管理で栽培すると、「ししわかまる」は「葵ししとう」より草勢が劣り、可販果実の量も少し減少します。

シシトウガラシ、ピーマン類では秀品率を高めるために、ハウス栽培等栽培期間が長い作型では主枝をU型やV型に吊り下げたり、垣根状に仕立てる立体的な整枝誘引法が採用されています。

そこで、「ししわかまる」についても秀品率の向上をねらって、昨年度からトンネル栽培の弓を利用して主枝を吊り下げの簡易な誘引法を検討しています（写真3）。

本年度は「ししわかまる」基肥の施肥量を増やす等、草勢を強めに管理する施肥管理と整枝誘引を組み合わせることで生育や収量性を調査しているところです。



写真2 慣行の放任に近い仕立て方



写真3 試験中の立体的な誘引法

3. 今後の取り組み

昨年度は露地栽培のみの生産でありましたが、本年度はハウス促成栽培の生産者も「ししわかまる」を栽培することになり、周年出荷が可能になります。「辛味果実の発生しないシシトウガラシ」の認知度はまだまだ低く、継続的な消費者へのPRと栽培管理法の確立を並行して進めていく予定です。

全国一のシシトウガラシの産地である高知県も「辛味果実の発生しないシシトウガラシ」を育成したという情報もあり、今後は市場での競合も予想されます。関係機関と連携し、先行産地として認知度を高めるとともに、一層の生産性の向上を目指していきたいと考えています。

普及活動レポート

REPORT

新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり

日高振興局 農業水産振興課

1. はじめに

近年、梅経営において梅干し加工への特化が進んでおり、梅干しの需給バランスが経営に及ぼす影響が大きくなっています。一方、市場ニーズへの対応や産地ブランド強化のため、青梅出荷量の拡大が望まれています。

栽培面では、梅や桜、桃などのバラ科樹木を食害する特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の被害が県下で拡大しており、日高地方に侵入した場合、梅への影響が大きく、産地では危機感が高まっています。

また、「露茜」は、果肉が赤く赤色着色原料として期待され、生産拡大に取り組んでいますが、平成 29 年に果実にまだら模様を呈する新病害「ウメ斑入果病」が発見され、早期の対策が求められていました。

以上のような状況において、当課では、新病害虫対策と梅干し生産への特化に対するリスク緩和を柱とした普及活動に取り組みました。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

(1) クビアカツヤカミキリの侵入警戒

令和元年 6 月、農業水産振興課が事務局となり、関係機関と共に「日高地方クビアカツヤカミキリ連絡会議」を設置し、迅速な情報共有と侵入時の初動活動体制を確立しました。

同会議では、早期発見を図るため、桜植栽地の発生状況調査を令和 2 年は 85 カ所、2,906 本を対象に、5、7、11 月に実施しました。

梅園地については 148 園、1,480 本を対象に、4、5、1 月に発生状況調査を実施しました。

いずれの調査においても成虫及び被害樹は確認されず、結果についてはマスコミを活用し迅速な周知を行うことで関心を高く保つことができました。

また、生産者や一般住民向けに注意喚起や防除啓発を行うため、6 月に JA 広報紙にチラシを折り込み（図 1）、8 月に市町の広報紙に記事掲載を実施したところ、クビアカツヤカミキリ疑いの通報が 2 年間で 10 件あり、危機感の高さがうかがわれました。なお、普及指導員等が現場を確認したところ、いずれもゴマダラカミキリ等の在来種でした。

令和 3 年度においても発生状況調査と注意喚起活動を実施しています。

(2) 「露茜」の生産振興

「露茜」の果実がまだら模様となる「ウメ斑入果病」が、平成 29 年に発見され、生産者や JA から早期解決が求められていました。

そこで、斑入果病ウイルス検定を令和 2 年は 86 検体（苗木及び高接ぎ樹 H30、R1 未実施分）実施し



図 1 注意喚起チラシ

ました。結果はすべて陰性（罹病率0%）で、12月上旬に生産者（サンプル提供者）に報告しました。3カ年で合計2,026検体を検定し、うち6検体（H30）が罹病していましたが、生産者によりすべて伐採されたことで罹病樹はなくなり、健全な果実生産が可能となりました。また、樹勢を維持し安定的な生産を図るため、主幹形栽培実証ほ（みなべ町清川）を設置しました。

収量調査では、1樹当たり4.0kg（前年2.6kg）で合計174kg/10a（前年114kg/10a）、樹体生育調査では、幹径48.6mm（前年42mm）、樹容積5.7m³（前年4.9m³）であり、今後の成長に伴い収量の増加が期待できる結果となりました（図2）。

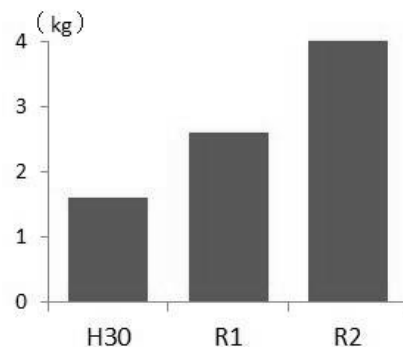


図2 「露茜」1樹あたりの収量の推移

（3）低樹高化技術による省力化栽培の推進

「南高」の成木は、樹高が4m以上にもなるため、収穫や管理作業にかかる労力負担が大きく、青梅出荷が増加しにくい一因となっています。この対策として低樹高化のためのカットバック処理と収量確保のための摘心処理を組み合わせた省力化技術がうめ研究所で開発されたことから、実証園を2ヶ所設置し技術実証と普及に取り組んできました。

令和2年度は、収量確保のための摘心処理を4月24日と5月21日に、収量調査を6月15日に実施しました（図3）



図3 低樹高化実証園収量調査

令和2年は記録的な不作の年であったこともあり収量にバラツキがみられましたが、摘心処理を施すことによりカットバックに伴う初期収量の減少を緩和していることが確認できました。また、収穫労力については各区の収量と収穫時間から算出した結果、平均15%の削減効果を得ることができました（表1）。

表1 低樹高化処理における収穫労力削減効果

		1樹あたり収量	果実10kgあたり収穫時間	収穫労力削減率※
熊瀬川実証園 (H30設置)	実証区	46.4kg	6.8分	(平均) 15%
	慣行区	12.7kg	7.0分	
清川実証園 (R元設置)	実証区	48.5kg	4.0分	
	慣行区	54.1kg	5.7分	

※) 収穫労力削減率 = 100 - 実証区の果実10kgあたり収穫時間の計 / 慣行区の果実10kgあたり収穫時間の計 × 100

3. 今後の取り組み

クビアカツヤカミキリ対策では、引き続き日高全域で発生状況調査を行うとともに、農業者以外にも注意喚起を図り、地域一体となった早期発見・被害防止対策を図ります。

「露茜」では、ウィロイド感染のない安全な苗木・穂木の供給により、みなべ町を中心に周辺市町へも導入を推進することで、栽培面積、生産量を拡大させます。

青梅安定供給のため、青梅出荷を主体とした地域を重点として、低樹高化（カットバック）+摘心処理技術導入による省力化栽培を普及させます。摘心処理を数年繰り返すことで結果層が上部に移行するのを抑制する手段として、結果枝の間引きや切り戻し技術を検討していきます。

普及活動レポート

REPORT

山間部における農業の維持

西牟婁振興局 農業水産振興課

1. はじめに

白浜町市鹿野地域で生産される「川添茶」、田辺市本宮地域で生産される「音無茶」は、茶産地として長い歴史があるものの、生産者の高齢化に伴う労力不足などから管理が不十分となり、茶樹の樹勢低下や病害虫による収量減少と品質低下が問題となっています。

また、紀中、紀南地方で人気のある山菜のひとつのイタドリは、乱獲やシカによる食害などにより、たくて商品性の高いものが年々採れにくくなっています。一方、中山間部では耕作放棄地が増えており、このままでは耕作放棄地となる可能性の高い農地を中心に、手間をかけずに栽培可能な作物として、イタドリとヨモギに着目し、現地栽培圃場を設け、栽培の容易さや収穫量、収益性を平成 28 年から令和 2 年まで検討しました。

ここでは、令和 2 年度までの普及活動について報告します。

2. 取り組みの経過

<茶>

(1) 茶樹勢回復実証園の維持・管理

令和元年 5 月 30 日、白浜町市鹿野にて中切り実証園（12a）を設定し、生育調査を行うとともに、川添緑茶研究会（会長：上村誠氏、8 名）を中心に定期的な研修会を実施し、樹勢回復の重要性を啓発しました。

(2) 茶共同営農形態の検討

令和元年 10 月に生産者とともに園地巡回を行い、中切りや病害虫防除、除草等の共同作業の実施について意見交換を行いました。その結果、共同作業を実施したいとの意向があり、また、平成 30 年から白浜町市鹿野に配属されていた地域おこし協力隊員が中心となり、試験的に茶園の管理作業を共同で行いました。

<イタドリおよびヨモギ>

○栽培実証圃での管理状況

イタドリ及びヨモギは栽培実証圃を設置し、生産者とともに圃場管理や収穫調査を行いました。イタドリは、田辺市龍神村宮代の休耕田 1a に、地下茎から育てたポット苗 50 株を平成 27 年 6 月に定植し、収穫の目安は、株元径 13mm 以上、草丈 30cm 以上としました。

ヨモギは、すさみ町太間川の休耕田 2a に、やまよもぎの地下茎 1,200 本を平成 30 年 2 月に定植し、収穫は、新芽の軟らかい部分 10cm 程度を鎌で刈り取りました。

3. 活動の成果

(1) 茶樹勢回復実証園の維持・管理

令和 2 年 10 月 28 日に実証園の生育調査を行いました。20cm × 20cm の枠内の夏秋梢の生育状況を調

査した結果、実証園の夏秋梢は、慣行園と比較して枝は太く、長さも約2倍、葉数も約2倍に増加し、樹勢回復効果が確認できました。

4月、6月、10月に同研究会会員と現地検討会、12月には中切り実証園の結果を報告し中切りの重要性について生産者に啓発しました。その結果、令和2年度の中切り実施面積は田辺市本宮町で12a、白浜町で7aとなりました。

(2) 茶共同営農形態の検討

令和2年10月15日、生産者とともに園地巡回を行い、中切りと病害虫防除の共同作業を実施した園において生育状況を確認しました。生産者からは、「葉層が厚く充実した芽が発生しており、春には良い茶葉が収穫できる。」、「共同作業により作業性が向上した。」との声が多く、今後も継続して取り組む意向です。

<イタドリおよびヨモギ>

○栽培実証園の各種調査結果

イタドリは、定植5年目となる令和2年の収穫調査は、3月の平均気温が平年より1.5℃高く推移したため、収穫始めは4月13日と前年より6日早くなりました。また、前年度にモグラ被害で低下した草勢が回復したため、10a当たり換算収量は494kgと前年対比139%となりました。また、林業試験場が選抜したイタドリの多収で皮のおみややすい優良系統が（一財）バイオセンター中津で優良苗として販売され、管内の12戸（2,040株）が購入し、栽培面積も増加（面積換算8a）しています。

ヨモギは、収穫調査を4月、5月に2回行い、10aあたりの換算収量は362.5kgと前年対比155%となりました。



川添緑茶研究会講習会



イタドリの草姿



収穫後のヨモギ

4. 今後の取り組み

<茶>

中切り実証園における生育調査を行い、調査結果をもとに生産者に対し、樹勢回復のための中切りを引き続き推進していきます。

共同作業については、地域おこし協力隊員が令和3年4月に白浜町市鹿野に新規就農して茶の栽培を行っており、既存農家とも連携して作業を継続しています。また、栽培技術の高位平準化を図るため、樹勢回復と基本的な管理作業についての栽培勉強会を定期的実施していく予定です。

<イタドリおよびヨモギ>

イタドリは、直売所での販売や加工原料として需要があり、生産の拡大を図っていきます。ヨモギは、直売所でのよもぎ餅販売に加え、餅加工業者向けの高品質原料として需要が見込めます。

普及活動レポート

REPORT

重点活動は、半世紀を迎えた“くろしお苺”産地の体力強化

東牟婁振興局 農業水産振興課

1. はじめに

令和3年度の普及活動として、重点課題の「半世紀を迎えた“くろしお苺”産地の体力強化」、一般課題の「じゃばら・ゆずの安定生産対策」、「地域の特性を活かした野菜の産地育成強化」に取り組みます。

2. 取り組みの経過、活動内容と成果

1) 半世紀を迎えた“くろしお苺”産地の体力強化

地域で生産されるいちごは、「くろしお苺」として親しまれ、地元市場から高く評価されていますが、生産者の高齢化や平成23年の紀伊半島大水害による被害もあり、生産が需要をみたさない状況となっているため、産地の維持や水害前の産地規模への復興に向けた普及活動を行います。

いちごに特化した就農支援体制の整備を支援し、前年度（令和2年7月）に生産者・JA・関係町で構成するみくまの産地協議会が設立しました。協議会は管内での新規就農者の研修等の支援を行っており、当課はオブザーバーとして協議会に参画しています。

就農希望者に対しいちご栽培を主とした農業経営を提案するため、協議会で作成したいちご新規就農プログラムや産地提案書を活用し、就農相談等に対応します。

協議会設立後に初めて、那智勝浦町において9月に1名（1ターン）が就農します。また、新たに1名（1ターン）が来年度の就農に向け研修を行っています。

また、いちご生産者全体を対象とし、経営の安定化や気象災害による経営リスクの低減を図るため、いちごの高品質・多収に向けた栽培技術向上を目的とし、JAと連携し適正適花（果）や病害虫対策の研修会を開催するとともに、国庫や県単を活用した耐風性ハウスや高設栽培施設の導入を推進します。



くろしお苺生産販売組合



産地面談会（1ターン）



いちごセミナー（炭そ病検定研修会）

2) じゃばら・ゆずの安定生産対策

じゃばらは、樹体の高齢化やカンキツ幹腐病の発生により生産量確保対策が必要となっているため、新植・改植を推進します。カンキツ幹腐病は、東牟婁地方のような降水量が多い地域で発生しやすく、管内ではじゃばらやゆずにおいて発生しています。

北山村大沼のじゃばら園に幹腐病対策の実証ほ10aを設置し、間伐や殺菌剤使用等による対策技術の効果を確認するとともに、生産者に対策技術の徹底を指導します。

ゆずは、生産者の高齢化・担い手減少により栽培管理が十分に行われず、隔年結果、カンキツ幹腐病の発生、鳥獣被害等が課題となっています。高齢者が安全に作業をできるように樹形改造（低樹高化）やカンキツ幹腐病対策を推進します。



じゃばら新植

3) 地域の特性を活かした野菜の産地育成強化

地産地消を目的とした野菜のミニ産地づくりや耕作放棄地解消に向けた普及活動を行っています。

くろしお熊野やさいグループが取組んでいるくろしお熊野野菜の13品目（ほうれんそう、こまつな、葉ねぎ、しゅんぎく、ピーマン、ししとう、なす、とうもろこし、えだまめ、ブロッコリー、キャベツ、にんじん、葉しょうが）について、現地検討会等で現地指導を行っています。

なお、たかなについては、今年度県で認定されたたかな栽培に係る匠の技伝道師とその匠の技の継承を希望する方とのマッチングを支援し、優れた栽培技術を次世代に引き継ぐとともに、昔から地域で親しみのある品目の産地振興を進めます。



くろしおナス現地検討会

3. 今後の取り組み

重点課題に係る産地の動きとして、前年度、みくまの産地協議会が設立し、就農希望者の支援体制が構築されたことから、いちご栽培を主とした農業経営を、県UIターン就農相談フェア等で紹介し新規就農者及び新規栽培者を確保するとともに生産者全体の経営の安定化を図り、生産者や関係機関と連携しながら普及活動を展開し、平成23年の紀伊半島大水害前の産地規模への復興を目指します。

こんな技術知ってる？

富有柿のジョイント栽培

紹介者

橋本市 青年農業士

小林 大将

私は平成 21 年に就農し、自身の果樹園で様々な整枝・剪定技術を試してきました。今回は、その中でも富有柿栽培で大幅な省力化が期待できるジョイント栽培について紹介します。

1. 技術の概要

(1) ジョイント栽培とは

神奈川県で開発された、一列に植栽した苗木を隣の苗木に接木により連結して成園化する技術です。この技術は、ナシ及びウメを対象樹種として特許を取得されています（神奈川県、平成 24 年 1 月 6 日付け、特許第 4895249 号）。

(2) ジョイント栽培の基本樹形

長さ 2 m 程度の 1 年生苗の先端を切り返さずにそのまま用いて、株間 0.8 ~ 1 m、列間 3.5 m の間隔で定植し、主枝の高さを 60cm として先端を水平に倒し、隣接樹と樹体ジョイント（接ぎ木）します。

2. ジョイント栽培のメリット

(1) 生育の均一化

慣行立木栽培では個々の樹、及び 1 樹のなかでも先端側と基部側で生育に差が出ます。

ジョイント栽培で一体となった樹は、個々の生育差がなくなると同時に、1 樹のなかでも先端側と基部側の生育差が年数経過とともに少なくなります。

(2) 早期多収化

ジョイント栽培では植栽 3 年目から収穫でき、早期成園化が可能です。

(3) 管理作業の軽労・省力化

着果位置が低く、脚立を使った高所作業がなくなることから、摘らいや摘果、収穫作業の省力化が図れます。

3. 最後に

私は管理作業の省力化を目的に、1 列 25 本、22 m のユニットでジョイント栽培を導入しました。摘蕾等の管理作業が非常に楽になり、作業の見通しがつきやすい効果もあります。しかし、導入後に見えてきた課題としては、①主枝の位置が低いため、こまめな草管理が必要です。②ジョイント部分のヒメコスカシバ対策、③園地の適応性も考える必要があります（傾斜地での導入は難しく、平地の園地が必要）。また、樹が低すぎて作業のしづらい部分もあるため、導入目的をはっきりさせる事が大切です。



ジョイント栽培の園地



ジョイント栽培（収穫期）



隣接樹とのジョイント



主枝の位置が低いため
草管理はこまめに

地域の逸品!!

「わかやま布引だいこん」がGI制度に登録

紹介者

和歌山市 指導農業士

吉田 謙二

● 商品の紹介

私からは、地理的表示保護制度（GI 制度）に和歌山県の農作物で初めて登録されました。和歌山市布引地域で生産されている「わかやま布引だいこん」についてご紹介します。

GI 制度とは、地域で長年育まれた伝統と特性を有し、播種日から算出した生育日数管理と適期収穫によって、高い品質や評価を獲得している農林水産物や食品の名称を、知的財産として保護する制度になります。

「わかやま布引だいこん」は、和歌山市布引地域の砂質土壌で生産される青首大根で、根の上から下まで太さが揃いヒゲ根が少なく、肌が美しいのが特徴です。また肉質は、水分を多く含み柔らかいので、煮物にぴったりでおでんやぶり大根などの他、サラダや漬け物などにも適しております。産地に適した品種選びと、徹底した生育日数の管理により、安定した品質を保ち、市場をはじめ各所から高い評価を得ています。

「わかやま布引だいこん」は、11 月中頃から収穫が始まり、12 月中に出荷のピークを迎え、2 月末頃まで続きます。JA わかやま直売店の「愛菜てまりっこ」等で販売していますので、期間中にぜひご賞味ください。

● お問い合わせ先

JA わかやま直売所「愛菜てまりっこ」

〔かせい店〕

和歌山市榎原 223 - 26 TEL 073-452-3883

〔いさお店〕

和歌山市園部 1449 TEL 073-462-4841

〔しかごなかのしま店〕

和歌山市有本 18-1 TEL 073-471-5211

〔さいか店〕

和歌山市西浜 1-1-1 TEL 073-444-1444

〔おかざき店〕

和歌山市寺内 574 TEL 073-476-4001



わかやま布引だいこん



GI マーク

地域の逸品!!

地域ブランドを活かした特産品のコラボによる オリジナル梅干し

紹介者

みなべ町 地域農業士

平野博文

1. 商品の紹介

みなべ町は、先人達の弛まぬ努力で梅のトップブランドとなった「紀州みなべの南高梅」の産地です。これまで多くの梅干しファンに支えられてきた白干し梅をはじめ、数々の調味梅干しが開発されてきました。しかしながら時代とともに商品の硬直化が進み、新たなイメージを持った梅干しの開発が求められるようになってきました。

【tomato-ume】

みなべ町に隣接する印南町の特産品である高糖度のミニトマトブランド『優糖星』を活かした商品開発に取り組み、コラボ商品である『tomato-ume』が誕生しました。糖度8度以上の高糖度ミニトマト「優糖星」の果汁を味付けに使用し、独自の製法で加工したデザート感覚で食べることができる梅干しで、数々の賞を受賞するなど女性や若年層を中心に幅広い年齢層から好評を博しています。

【みかんこい梅】

由良町が発祥で、日高川町でも多く栽培されている高糖度の早生みかん「ゆら早生」に着目。この「ゆら早生」の果汁（糖度11度以上）を味付けに使用した新商品『みかんこい梅』を開発し、令和元年11月から販売が始まりました。フルーツ感覚で食べられるので、梅干しに慣れていない方にお勧めです。

日高地方の特産品がコラボした新感覚の梅干しをぜひお試しください。

<取扱店舗>

JA 紀州ほんまもん直売所（みなべ町）

// フレッシュマート（印南町）

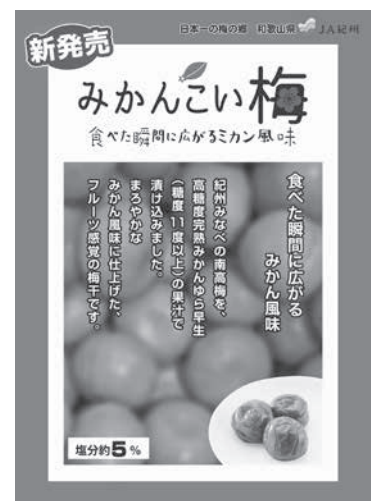
紀の川サービスエリア（上り線）

2. お問い合わせ先等

JA 紀州 販売部 加工直販課

645-0011 和歌山県日高郡みなべ町気佐藤 321-6

Tel 0739-72-4387 Fax 0739-72-5063



地域の逸品!!

できたての香りで食欲が増します!!

「めはりずし」

紹介者

新宮市 指導農業士

道 阪 耕 一

1. 商品の紹介

元地域農業士の竹田愛子さん（新宮市熊野川町）が代表を務める熊野川産品加工組合かあちゃんの店の作るめはりずしを紹介します。

熊野川産品加工組合は平成12年に結成され、平成13年にかあちゃんの店が開店しました。紀伊半島大水害（平成23年）で被災されましたが、平成24年に仮設店舗で営業を再開し、平成27年に現在の施設に復旧されています。

かあちゃんの店では、地域食材の活用やPRに積極的に取り組んでいます。地域のたかなを使った“めはりずし”は、テイクアウトや食堂で楽しめます。なお、特に食堂では味噌や醤油の香りが口いっぱい広がる温々のめはりずしが食べられます。

また、かあちゃんの店では、めはりずし以外にも、人気で売り切れることもある“よもぎもち（忠度もち）”や“おまぜ（ちらし寿司）”等もあり、どれもおすすめです。

当地域にお越しの際は、ぜひ、新宮市熊野川産のたかなを使った昔ながらのめはりずしをお楽しみください。

竹田さん達は、たかな栽培の匠の技伝道師の活躍による、地域産たかなの増産を期待しています。地域農業の活性化にたずさわる皆さんの活躍が楽しみです。



写真 めはりずし



写真 よもぎもち
※忠度（ただのり）もち

2. お問い合わせ先等

「熊野川産品加工組合 かあちゃんの店」

新宮市熊野川町田長 54-7

TEL：0735-44-0480

営業時間：9：00～16：00 定休日：第2水曜日

【クビアカツヤカミキリ対策】 早期発見、早期駆除が重要！ ～ 秋から春 ～

- 令和元年11月にかつらぎ町で県内ではじめて被害が確認されて以降、令和3年8月時点で、かつらぎ町、橋本市、紀の川市、岩出市、和歌山市のもも、すもも、うめで被害が拡大しています。
- 幼虫は冬になるまで樹の内部を食害します。生産者の方々は、常に園地をよく見回り、フラス（虫糞と木くずが混ざった物）を発見したら最寄りの振興局またはJAに連絡（発生地域を把握）するとともに、防除対策を徹底するようお願いします。



株元に溜まったフラス



幼虫は樹体内を食害し、加害が酷い樹は、枯死に至ります。

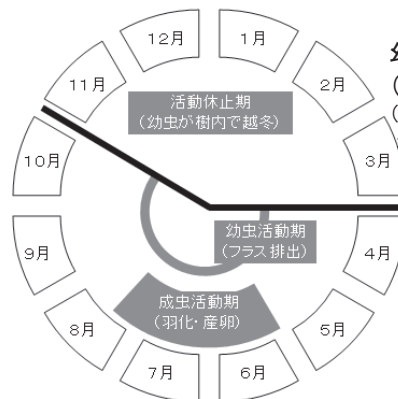


ミンチ状のフラス

じっくり、
近寄って
チェック



成虫は体長2.5～4.0cmで6～8月に発生します。光沢のある黒色で、前胸（クビ）は赤色です。繁殖力が強く、1頭あたり300～400個産卵し、1,000個以上の産卵事例もあります。



幼虫は11月頃まで活動！（フラスを探しましょう）
（大阪府「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策」を参考に作成）

防除対策

- 被害木の伐採・抜根は成虫脱出時期以外の9月～翌年4月行います。伐採木は放置せず、直ちに破砕あるいは焼却するなど、適切に処分します。被害木を園外へ持ち出す場合は、伐採木を防風ネット又はビニールシートで覆って飛散防止措置をした上で運搬するようにしてください。
- 伐採できない場合は、幼虫の掘り取り、捕殺をしてください。フラス排出場所の表皮をマイナスドライバー等ではずし、太めの針金等を用いて食入孔のフラスを掻き出し幼虫を刺殺します。
- スプレー型の農薬を注入する場合は、太めの針金等を食入孔に入れ、中のフラスを掻き出し、ノズルがフラスで詰まらないよう薬液を出しながら注入します。
- 掘り取り、捕殺、農薬注入した後は、被害樹を4mm目合いのネットを2重に巻き付け、羽化後の成虫が他の樹に拡散するのを防ぎます。

支援策（病害虫防除対策事業）

県では、被害樹の伐採、抜根、ネット被覆に対する費用を支援しています。詳細は、最寄りの振興局にお問い合わせください。

令和4年度 和歌山県農林大学校農学部 学生募集！

和歌山県の農業に活力を与え、地域リーダーとして活躍できる人材を育成する農林大学校。

令和4年度の農学部の入学試験を下記のとおり行います。



※) 詳細は募集要項で必ずご確認ください。

学科	一般入学試験（前期）	一般入学試験（後期） ※一般入学試験（前期）で定員を満たした場合は実施しません。
募集人員	園芸学科：30名	アグリビジネス学科：10名
修業期間	2年	
試験日	令和3年11月30日（火）	令和4年3月2日（水）
受験資格	高等学校を卒業、または令和4年3月までに高等学校を卒業見込みの者（詳細は下記まで問い合わせて下さい）	
試験科目	1 筆記試験 ①必須科目 小論文、数学Ⅰ、国語総合 ②選択科目 生物基礎、化学基礎、農業と環境の3科目から1科目を選択 2 面接試験 農業、社会常識 など	
出願期間	令和3年11月11日（木） ～11月18日（木）	令和4年2月9日（水） ～2月17日（木）
合格発表	令和3年12月7日（火）	令和4年3月8日（火）
試験場所	農林大学校 農学部	
提出書類	ア 入学願書 〈本校指定用紙 別紙1-2〉 ※ <u>県外に住所を有する者は和歌山県農林大学校志望調書〈本校指定用紙 別紙2〉も提出のこと</u> イ 最終学校の卒業証明書 ウ 最終学校の調査書、または成績証明書 エ 健康診断書 〈本校指定用紙 別紙4〉 オ 履歴書 （市販のもの） カ 404円分の切手2組 ※令和4年3月卒業見込みの者は、イ、オは不要	

問い合わせ先

和歌山県農林大学校農学部

〒649-7112 和歌山県伊都郡かつらぎ町中飯降 422

TEL：0736-22-2203 FAX：0736-22-7402

ホームページアドレス

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/nourindaigaku/index.html>

（募集要項はホームページからダウンロードできます）



HPへアクセス！

(参考) 農業士について

昭和 51 年から県知事が認定している制度。

地域農業の振興と農村の活性化にリーダー的役割を果たしている農業者に対し、付与される称号。「指導農業士 (65 歳まで)」「地域農業士 (65 歳まで)」「青年農業士 (40 歳まで)」の3つの区分がある。

令和3年 11 月現在の認定者数は以下の通り。

指導農業士	144 名 (うち女性 31 名)
地域農業士	531 名 (うち女性 47 名)
青年農業士	124 名 (うち女性 1 名)
合 計	799 名 (うち女性 79 名)



表紙の人

かつらぎ町 指導農業士

西垣 俊秀さん

西垣さんはかつらぎ町の星山地区で、柿を中心とした経営に取り組まれています。園内道の整備や SS 等の導入による機械化により効率的な経営を行うほか、研修生等を積極的に受け入れるなど、担い手育成にも力を注いでいます。

「子供が後を継ぎたいと思ってくれる経営になるよう頑張っていきたい。」とお話ししてくださいました。

和歌山の農業士 第 17 号

発行日：令和3年 11 月

編 集：和歌山県

和歌山県農業士会連絡協議会

印 刷：有限会社 阪口印刷所



和歌山の 農業士

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

